研究紀要　第５号　１～36頁　2012年３月
兵　庫　県　立　考　古　博　物　館

# 兵庫県の考古学史115年の歩み

大平　茂

## 1. はじめに

明治７（1874）年、明治政府は陵墓・古墳の濫掘を禁止する「古墳発見ノ節届出方」（太政官達第59号）。さらに、明治13（1880）年に古墳の発掘規制・開墾などによる不時発見の届出制を定めるため、宮内省が「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」（宮内省達乙第３号）を告示した。

しかし、こうした法令があったにも関わらず、兵庫県内では明治17（1884）年に加西郡富合村玉丘古墳の主体部が無届けで濫掘され、長持形石棺から勾玉、管玉、刀剣などが出土している。また、これらの遺物は昭和６（1931）年に梅原末治（京都帝国大学、兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査事務委員）らが行った調査時には所在不明であった〔梅原1932〕。現在、後円部墳頂には大きな撹乱坑が認められ、長持形石棺底石などの部材が残されている。この状況では、県内初の発掘とするのは適切でない。

本稿では、明治29（1896）年（飾磨郡人見塚古墳）から平成23（2011）年（朝来市池田古墳）まで、約115年間の兵庫県内の遺跡発掘調査と発見（歴史）を振り返り、併せて摂津・播磨・丹波・但馬・淡路地域の研究動向、さらに現状と課題をみていきたい。

## 2. 明治時代

わが国の近代考古学は、明治10（1877）年のエドワード・S・モース（東京大学御雇教授）による東京・大森貝塚の発掘と報告〔エドワード・S・モース1879〕から始まった。

兵庫県内でも前記玉丘古墳とは別に、日本の古墳研究の先駆者として名高いウィリアム・ゴーランド（大阪造幣寮御雇技師）が、明治17（1884）年か18年に姫路を訪れて御輿塚古墳ほか２基の横穴式石室を調査している〔ウィリアム・ゴーランド1981〕。その後、明治21（1888）年には、坪井正五郎（東京大学人類学教室）も明石郡五色塚（千壺）と飾磨郡人見塚や御輿塚を踏査した〔坪井1894〕。遺跡・遺物の採訪記録では笹川種郎〔1888〕の「播磨ノ塚穴及ビ千壺ノ事」や、赤堀素一〔1889〕の「淡路国の津名郡ノ塚穴」、八木奘三郎〔1894〕の「播磨国千壺取調報告」、奥村探古〔1897〕の「摂津国武庫郡おとめ塚」、丹後の稲葉宅蔵〔1898〕「但馬に於ける古墳」などの報告がある。

県内最初の発掘調査は、明治29（1896）年３月20日～25日に和田千吉（姫路在住、後に東京帝室博物館）が行った飾磨郡白国村の人見塚古墳である。和田は東京人類学会会員であり、前年の10月25日に兵庫県知事に出願し、１月９日付けの許可を得ている。この古墳は直径約18m、高さ5.4mの円墳で、墳丘には葺石と埴輪が存在した〔第１図、和田1897〕。埋葬主体部は粘土槨であろう。出土遺物は内行花文鏡、勾玉・管玉、剣・刀などがある。調査成果は、古墳における円筒埴輪の性格を捉えたことと、当時貴重な家形埴輪の復元に成功したことである。県立考古博物館でも、平成19（2007）年１月の開館記念特別展Ⅱ「“おかえり”故郷へ」において、この家形埴輪を天理大学参考館から借り受けて展示した。

こうした出土品は、当時宮内省の管轄であった。「遺失物法」や「内務省令」によって、発見者が警察に届出て、警察から報告を受けた道府県が宮内省に届けるのである。この後、石器時代のものは東京帝国大学、古墳出土品は宮内省に属する東京帝国（室）博物館で保管することになった。この取り扱いにより、人見塚古墳主体部の鏡などは帝室博物館の所有とされたが、なぜか埴輪類は和田の元に残され

たままであった。そして、和田が東京への転居に伴って持ち運び、12年もの年月を要して家形埴輪が復元された。その後、和田の死去と戦後の混乱の中、骨董屋に流れたものを天理大学が購入したということのようである〔浅田芳朗1970〕。

さらに同年、和田千吉は東京人類学会に倣って、「中国人類学会」を設立している。ここに、兵庫県内（播磨）での一大研究拠点が生まれ、華々しい活動を見せたのである（会員数72名）。しかし、明治31（1898）年２月の第20回例会をもって中断し、翌年９月には和田が上京したことで会活動も完全に停止してしまっている〔浅田1963〕。

また、この明治29（1896）年には県内でもう一つ重要な発掘が行われた。篠山育ちで当時新進気鋭の考古学者八木奘三郎（東京帝国大学人類学教室）の勧めにより、多紀郡雲部車塚古墳を地元の雲部村長木戸勇助らが皇族方の墳墓かどうかを確認するために発掘したのである。なお、届出は提出していない。石槨内の遺物を一部持ち出したが、石棺は開けなかったと言う〔八木1901〕。出土品は、京都帝国大学（現京都大学総合博物館）が保管する。近年、宮内庁書陵部の調査により古墳の規模は全長158m、後円部径104m、前方部長76m、前方部幅112m、墳丘は三段築成であることが明らかにされた〔徳田誠志他2006〕。なお、明治33（1900）年には「不敬」回避の努力で陵墓参考地となり、同43（1910）年に木戸が発掘記録やこれらの経過などを『車塚一蒔』として整理している〔木戸1910〕。考古博物館では、この絵図や「何人カノ筆ニ成ル見取図」などの写しから竜山石製長持形石棺を復元すると共に、出土遺物である甲冑などの資料調査と併せ、石槨内の再現展示を試みたのである〔雲部車塚古墳研究会2010〕。

翌明治30（1897）年には、揖保郡吉島古墳で地元民が三角縁神獣鏡・ガラス玉などを掘り出した。これらは、現東京国立博物館が所蔵する。発掘（盗掘？）の契機は観音像が埋もれているとの夢見であり、これまた無届けであった。その後、梅原末治が地元での古墳発掘の聞き取りと出土品の調査結果を報告している〔梅原1925〕。また、同年には「中国人類学会」が八木奘三郎の指導を受けて、飾磨郡山の越古墳（石棺）の発掘調査を行ったのである。

次いで、「中国人類学会」活動停止後の新たな研究の場として、明治38（1905）年に福原潜次郎（会下山人）らが神戸市雪見御所跡発見を機に「神戸史談会」、そして同40年には高浜信民・矢内正夫らが「姫路（後に播磨）史談会」を立ち上げ、地域の核として調査・保護活動を始めた（『播磨史談会誌』など）。また明治39（1906）年、郡誌で最初の『印南郡誌』が刊行され、続いて同41（1908）年、『赤穂郡誌』も刊行されている。これらは、地方史編纂の先駆けとして大きく評価できるものである。

明治44（1911）年、淡路地域で最初の発掘調査が行われた。浜田耕作（京都帝国大学）の指導を受け、三原郡阿那賀村の鎧先古墳群を地元の青年団と安富冶太郎が発掘した〔岡本稔1971〕。須恵器・玉類・鉄器など出土品は、現京都大学が保管している。同時に、浜田は慶野松原砂丘地帯の踏査も試みた。同年には、摂津の川辺郡栄根で銅鐸が出土し、東京帝室博物館の所蔵となる〔彙報1912、梅原1927〕。

このように、明治時代は外国人や日本の考古学・人類学の草分けとなる人たちが来県し、様々な影響を及ぼした。その後、全国に先駆けて和田千吉が有意義な発掘を実施したのである。

研究報告は『東京人類学会雑誌』や『考古界』（後、『考古学雑誌』）に投稿するか、中国人類学会または各地史談会での発表が主である。遺跡･遺物の採訪記録の域に留まるものが多い中、『東京人類学会雑誌』に２編に分けて寄稿した和田千吉「人見塚調査報告」が特筆されよう。研究者として、播磨に和田千吉・原田正彦・高浜信民、摂津に福原潜次郎・奥村舜一・中村士徳、淡路には安富冶太郎らがいた。先の木戸勇助も、中国人類学会第４回例会において車塚古墳調査の発表を行っている。

それにしても、和田が明治32（1899）年以降東京に活動の場を移した後、中国人類学会をまとめる人材の無かったことが悔やまれてならない。そのため、県単位ではなく今に繋がる旧五カ国ごとの地域別研究活動（五カ国を一つの県にしたのが無謀で、歴史的には自然の成り行きか）が始まったのである。

## 3. 大正時代～昭和前半（太平洋戦争まで）

大正５（1916）年には、浜田耕作（京都帝国大学）が文学部に日本で最初の考古学講座を開設した。

この時代の研究活動の場は先の「神戸史談会」・「播磨史談会」に加え、大正２（1913）年に「多紀史談会」、同４年に吉井良尚・田澤金吾・辰馬悦蔵らが「西宮史談会」、続いて同５年に矢倉和三郎（甫田）・宮崎俊男らの「明石史談会」、少し遅れて大正11（1922）年には小林久之助（楓村）が「相生矢野史談会」、そして、昭和元（1926）年に栗山一夫（赤松啓介）も「摂津史談会」を設立している。また、大正３（1914）年には『加古郡誌』が刊行された。

発掘調査歴では、まず但馬地域に大正元（1912）年、城崎郡気比で石材採取中に銅鐸４個（東京国立博物館蔵）が出土した〔今西龍1913、梅原末治1927〕。近年の研究では、大阪府東奈良遺跡出土の鋳型で製作したものがあることや、銅鐸の再埋納とも考えられている〔井上洋一1982〕。大正３（1914）年、堀内清による出石郡中谷貝塚の調査が報告された〔堀内1914〕。また、同年には城崎郡の小見塚古墳が土取り工事で破壊され、粘土槨から三角縁神獣鏡（東京国立博物館蔵）、墳丘からは但馬最古の埴輪が出土した〔梅原末治1925〕。大正４（1915）年、『美方郡誌』が刊行されている。大正６（1917）年には、出石郡の森尾古墳で別荘地造成中に３基の小石室が発見され、それぞれ銅鏡、玉類、鉄器などが出土した〔梅原末治1925〕。中でも、正始元年銘（京都大学総合博物館蔵）と新作大鏡銘（東京国立博物館蔵）の三角縁神獣鏡が注目される。また、一部の出土品は地元にも残された。大正11（1922）年には、桜井勉が『校補但馬考』を著している。旧五カ国の中で調査研究に遅れをとった但馬地域にも、やっと考古学的な動きが始まってきた。これら気比の銅鐸と森尾古墳出土の鏡なども、開館記念展Ⅱ「“おかえり”故郷へ」で展示したところである。

播磨では大正５（1916）年に、姫路市の日之出紡績工場の建設工事中に千代田遺跡（貝塚）が発見された〔小西孝四郎1916〕。その後、明治末年にかけて「播磨史談会」は宮内省御用掛増田子信と調査を実施した玉丘古墳や壇場山古墳について、古墳保護の立場から同７（1917）年に県知事へあてた壇場山古墳の保存上申書を提出している（玉丘古墳は、明治44（1911）年に宮内大臣へ上申）。

さらに、大正８（1919）年に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定されると、兵庫県も大正９（1920）年に「史蹟名勝天然紀念物調査会」を創設し、専務嘱託員を常置して調査に当たった（史蹟関係には梅原末治・武藤誠・辰馬悦蔵らがいる）。そして、現地を調査し保存策を講ずると共に、大正12（1923）年からその調査成果を報告書として刊行している（第１輯には五色塚古墳や壇場山古墳など、第２輯には東求女塚古墳・ヘボソ塚古墳・夢野丸山古墳・得能山古墳など古式古墳を報告、昭和17（1942）年の第16輯まで発刊）。

江戸時代に数多くの銅鐸が出土したことで知られる淡路では、大正７（1918）年頃に喜田貞吉（京都帝国大学）が日光寺銅鐸・慶野組銅鐸を調査し、辰馬悦蔵も松帆発見の銅鐸を報告する〔辰馬1918〕。大正13（1923）年には、梅原末治が淡路出土の一銅鐸を記し、型式分類を行っている〔梅原1923〕。また、大正時代の末年に、津名郡でミカン畑の開墾中に小型の竪穴石室から三角縁神獣鏡（東京国立博物館蔵）が出土した。コヤダニ古墳で、宇山牧場古墳と共に島内の数少ない古墳時代前期のものである。

その他、丹波では大正７（1918）年に『多紀郡誌』、摂津では同10年に『武庫郡誌』、同13年に「武庫地方上代の遺物遺蹟」『神戸市史』別録１、播磨では大正12（1923）年に『宍粟郡誌』、『加東郡誌』と『多可郡誌』が刊行された。

こうして、大正時代には「史蹟名勝天然紀念物調査会」の梅原末治らによる実証的な研究が確立されてきた。なお、残念なのは保存法の制定された年に、猪名川流域で最古の一つと考えられる尼崎市池田山古墳が阪急電鉄神戸線の工事で消滅したことである。

さて、東京からの帰途姫路に立ち寄り、後に病気療養を兼ねて明石に移り住んだ若き日の直良信夫が、大正14（1925）年に「直良石器時代文化研究所」を開設すると共に、活発な県内遺跡の調査・研究を行っている。昭和元（1926）年、研究所の所報第１輯『播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究』を出版。さらに、同３年には明石川流域で数少ない縄文時代の遺跡である元住吉山遺跡を調査した（後、春成秀爾が先の直良の書に、この遺跡調査も加え『大歳山遺跡の研究』として再刊〔春成編1987〕）。

その他、昭和元年に加古郡の望塚銅鐸出土地の調査（当該品は平成22（2010）年に県立考古博物館の所蔵となり、発見地は東沢１号墳所在地と判明）、昭和３年に明石郡垂水の投上銅鐸の調査、同６（1931）年には淡路松帆砂丘地の遺跡と遺物の報告も実施している（後、これら明石時代の考古学研究成果を、『近畿古代文化叢考』〔直良1943〕・『近畿古代文化論考』〔春成編1991〕に収録）。

また、直良は昭和２～５年にかけて、明石郡西八木海岸で採集した石器と出土地層などの詳細な観察から、日本に旧石器時代があったことを昭和６年『人類学雑誌』に２回に分けて執筆した〔直良1931〕。その論文擱筆の約一ヶ月後、西八木海岸で人骨片（後に、長谷部言人がニッポナントロプスアカシエンシスと命名）を発見するのである（1931.5.3大阪朝日新聞記事）。なお、公表は昭和11年のことであった〔直良1936〕。しかし、発見の旧石器は鳥居龍蔵らにより批判を受け、人骨もまた東京帝国大学・京都帝国大学など学会に無視・誹謗中傷されている〔春成1994〕。さらに、松村瞭（東京帝国大学人類学教室）に預けた実物は直良に返却されたが、惜しいことに太平洋戦争の東京大空襲で焼失してしまうのである。

このように、後に「博物学者」と呼ばれた直良信夫は兵庫県内に在住すると共に、日本考古学界に大きな影響を与えた時期があったのである。なお、旧石器時代の存否については、弥生文化を原始農業の所産と理解した森本六爾と同様、不可思議なことで官学や学会からの批判的な圧力が大きく、時期尚早（当時の環境が未成熟）だったと言えよう。

次いで、昭和元（1926）年、播磨で『佐用郡誌』と『美嚢郡誌』が刊行された。同２年には播磨の『飾磨郡誌』、丹波の『氷上郡誌』（上巻）、同４年には播磨の『加西郡誌』が刊行されている。

昭和５（1930）年、森本六爾が設立した「東京考古学会」（弥生時代が稲作農業を生産基盤とする社会と位置づけた在野の研究グループ）には兵庫県関係者として和田千吉、小林行雄、浅田芳朗、直良信夫、太田（名倉）陸郎、島田清、辰馬悦蔵、紅野芳雄、宮川雄逸らの名前が見える。また、全県的にはこの頃から昭和10年代にかけて、県史蹟委員・嘱託である辰馬悦蔵・梅原末治・武藤誠らが播磨宍粟郡神戸村銅鐸発見地（昭和２年）、揖保郡龍子三ッ塚古墳（昭和６年）、加西郡玉丘古墳（昭和６年）、姫路市奥山大塚古墳（昭和９年）などの破壊された古墳の調査や、過去に発見された青銅器出土地の調査を行い、『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』にそれぞれ結果を掲載している。

播磨では、森本と和田の影響を強く受けた浅田芳朗（当時早稲田大学学生）が、東京在住中の昭和５（1930）年に「播磨文化研究会」（雑誌『播磨文化資料』）、同７年には「播磨郷土研究同攷会」（会誌『播磨』）、そして昭和10（1935）年「播磨文化学会」（『播磨文化』）と解散・設立を繰り返し、従来の史談

会的文献本位の郷土研究を排し、考古学・民俗学による合理的な研究方法を推進する積極的な活動を行った。これに島田清、鎌谷木三次や今里幾次ら、当時少壮の人たちが参加したのである。なお、時代の状勢で森本と絶縁させられた浅田は同10年11月に姫路へ帰り〔浅田1982〕、翌年「郷土文化社」（後、「郷土文化学会」と改称）を設立する（戦後、「播磨郷土文化協会」へ移行するなど長い中断期間はあったものの、平成７（1995）年まで実質約60年間継続した〔福井優2010〕）。この会が、帰郷後の心の支えだったに違いない。昭和６（1931）年には、『揖保郡誌』が刊行された。浅田も、同10年に「兵庫県考古学関係文献総目録」（『兵庫史談』第４巻第10号）を発表している。

昭和11（1936）年、姫路駅操車場の拡張工事中に、弥生時代の市之郷遺跡を発見した今里幾次は、同14年から数年の間、姫路市小山遺跡の試掘を行った〔今里1939〕（この成果は、1969年「播磨弥生式土器の動態」として『考古学研究』に発表）。さらに、同15（1940）年には辻井遺跡で縄文人骨を発見している。次いで、昭和17（1942）年には、鎌谷木三次が踏査した溝口廃寺・辻井廃寺など寺院跡34カ所について、『播磨上代寺院址の研究』を出版した〔鎌谷1942〕。現在も、引用されることの多い労作である。同年、『神崎郡誌』も刊行されている。

東播磨では、昭和９（1934）年に栗山一夫（赤松啓介）〔1934、1935〕が「東播古墳調査委員会」の報告を基に、「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」を発表した。当該報告は、考古学を使用した地域研究の先駆的な業績として全国的に評価されている。これが、後「古代集落の変遷と発展過程」〔赤松1937〕に繋がって行くのである。さらに、同11（1936）年に赤松は東播古墳調査委員会を発展的解消し、玉岡松一郎（民俗学者）らと「兵庫県郷土研究会」を立ち上げた。

また、昭和12（1937）年には加西郡在田村笹倉の住民が亀山古墳を発掘した。この顛末は、梅原末治によって『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14輯に掲載されている〔梅原1939〕。二つの埋葬主体部から鏡と甲冑などが出土し、現東京国立博物館で保管している（近年の加西市教育委員会の再調査では、主体部の一つに副葬品箱を持つことが判明した）。また、稀有な例として昭和19（1944）年には加西郡鶉野飛行場の建設に当たり、地元の三浦三次・荒瀬常次らが下里村村長と交渉し、建設技師に遺跡の重要性を説いた結果、野条廃寺を保存している〔古家実三1958〕（後、昭和43（1968）年に甲陽史学会が調査し、市指定となった）。

摂津では、昭和２（1927）年に神戸市会下山二本松古墳を浄水池建設工事中に発見、調査が行われている〔辰馬他1928〕。竪穴石室からは銅鏡や鉄製品が出土しているものの、これらの所在は明らかでない（当時は円墳に考えられていたが、後年の神戸市教育委員会の調査で全長55mの前方後円墳と判明）。同４年、『有馬郡誌』（上巻）が刊行されている。

次いで、昭和９（1934）年にハイキングコースを造った際、川辺郡万籟山古墳の竪穴式石室を発見し、翌年京都帝国大学の梅原末治らが調査した〔梅原1937〕。出土品は土地所有者分を恩賜京都博物館（現京都国立博物館）に寄託、そして梅原調査分が京都帝国大学に保管された。同11（1936）年、摂津『御影町誌』が刊行され、宮川雄逸（新聞社勤務）は兵庫県内最古の考古系博物館である私立「宮川石器館」を開館している（川西市加茂遺跡の採集品を展示、〔大平2006〕）。

昭和12（1937）年には、川辺郡安倉高塚古墳が道路敷設工事で発見され、墳丘を削り取られた。土地所有者の塚本が、赤烏七年銘鏡などの遺物を採集している（出土品は、現在県立考古博物館が所蔵）。その直後、梅原らによる調査と報告も行われた〔梅原1939〕。また、同13年には尼崎市園田大塚山古墳の主体部が採土中に発見された。鏡などが出土すると共に、翌年視察で新たな埋葬施設（土壙）を発見し、

調査を行っている〔梅原・小林1941〕。出土品は、現京都大学が保管した。樋口清之〔1941〕は「摂津保久良神社遺蹟の研究」を発表している。

その他、『弥生式土器聚成図録』の刊行で戦前の弥生土器研究を推し進めた小林行雄（神戸高等工業学校卒、京都大学助手）の神戸市篠原遺跡や東山遺跡などの報告〔1929、1933〕と、大正６（1917）年から昭和13（1938）年まで西摂一帯の踏査活動を続けた紅野芳雄の記録が特筆されよう。「西宮史談会（再興、昭和14年）」の田岡香逸らが、この紅野の遺書『考古小録』を刊行〔紅野1940〕したのである。播磨では、今里幾次〔1943〕が「播磨市之郷弥生式遺跡の研究」を発表している。

丹波では、神戸史談会で活躍した篠山生まれの福原潜次郎（会下山人）が昭和９（1934）年に『多紀郷土史話』を刊行し、多紀郡内の古墳・遺物について貴重な記録を残している。また、同年「多紀史蹟研究会」を設立した奥田常造（楽々斎）も忘れてはならない（月刊誌『会報』を刊行、昭和14年廃刊）。さらに、福原は太平洋戦争の末期に神戸から篠山へ疎開し、「篠山史談会」を結成すると共に後進の指導を始めたのである。

淡路地域では、昭和５（1930）年に秦猪平を会長に「淡記会」が結成された（真野友二郎・武井三代吉らが淡記漫録、後淡路耽奇漫録を刊行）。また、昭和６年には郡家荒神山古墳（横穴石室）の調査を、地元石上元一の依頼により魚澄惣五郎と武藤誠が実施している〔石上1932〕。また、昭和17（1942）年洲本市加茂国民学校の校地整地中に、多量の弥生土器・石器などの遺物が出土した（下内膳遺跡）。同校教員の沖田真一は出土状況を記録すると共に、これらを採集する〔加茂国民学校1943、沖田1966〕。論考では、昭和７（1932）年に地元の鍛冶利夫が「淡路の遺物と遺跡について」、翌年「淡路国発見の銅鐸数について」を発表している〔鍛冶1932・1933〕。

各地域とも、主に史談会などの郷土史研究者と県史蹟調査委員が弥生時代集落址や古墳の調査・研究を進めてきた時期である。兵庫県においても梅原末治ら「史蹟名勝天然紀念物調査会」の存在は大きいものがあった。こうした状況の中、京都大学の小林行雄、播磨の今里幾次ら新進の研究者も育っていた。なお、播磨地域の郷土研究者の中には浅田芳朗や赤松啓介のように、考古学・民俗学による合理的な研究方法を推進した人々がいたことを、我々は語り継がなければいけない。

## 4. 太平洋戦争後～昭和30年代

戦後の考古学は、昭和21（1946）年静岡県登呂遺跡の発掘、そして群馬県相沢忠洋の日本にも縄文時代に先行する旧石器時代の文化が存在したという考古学史上最大の発見（岩宿遺跡）から始まった。

全国的に兵庫県の名前が登場するのは、同34（1959）年の姫路市名古山遺跡の銅鐸鋳型出土（全国初）であるが、それ以前にも新たな研究を進める素地が生まれていたのである。

昭和20（1945）年、赤穂郡矢野の小林楓村が「西播史談会」を立ち上げた（『西播史談会会報』刊行）。翌年、浅田芳朗は今里幾次と『播磨国石器時代地名表』（郷土文化学会研究報告第３冊）を刊行している。同22（1947）年に浅田は今里・穂積勝次郎・横山忠雄らと「播磨郷土文化協会」を立ち上げ、会誌『播磨郷土文化』を発刊した。そして、浅田芳朗の提唱によって神戸史談会・西宮史談会・東播文化人クラブなどを加え「兵庫県郷土研究連盟」が結成された。ようやく、中国人類学会以来の大きな枠組みが復活できたのである。また、同年には戦前に茨城県新治郡衙跡の調査で大きな成果をあげた高井悌三郎が甲陽学院に転職し、西宮へ住居を移すと共に「甲陽史学会」（昭和22年結成、田岡香逸・高井・宮川秀一）を誕生させている（昭和24年、田岡と共に兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査委員に委嘱）。さらに、

摂津では『有野村誌』が刊行された。

昭和23（1948）年には、登呂遺跡の発掘を契機として「日本考古学協会」が設立された。増田重信も生野町から福崎町に転居すると共に、播磨と但馬の考古学研究を開始している。兵庫県教育委員会では社会教育課内に文化財係が設置され、文化財行政を主管する体制が整えられた（翌年、専門職員に島田清が着任）。さらに、同28（1953）年に兵庫県文化財保護条例（旧条例）を制定、指定制度も整備したのである。

昭和24（1949）年、摂津では村川行弘（尼崎高校教員、後に大阪経済法科大学）が尼崎市金楽寺貝塚（奈良時代～鎌倉時代）の調査を行い、「東大寺領長洲御厨」の漁民集落であることを明らかにした。歴史時代の貝塚で、文献と考古学を結びつけた貴重な調査であった。播磨では、武藤誠（関西学院大学）が上郡町西野山１号墳箱式石棺の調査を行い、鏡と熟年男子の遺骸を発見している〔武藤1949〕。

翌25（1950）年、芦屋では黒川幸七が「黒川古文化研究所」を開設（後、西宮市へ移設）、この理事兼研究員に武藤誠が就任する。また、西播磨では西野山古墳の保存にも取り組んだ赤穂の眼科医松岡秀夫は同年財団法人「有年考古館」を開館し、翌年に館事業として西野山３号墳の学術調査を実施している。但馬では、地元の山根武が近藤義郎・楢崎彰一の支援を受け、前年に発見した村岡町タツケ平遺跡（縄文・古墳時代）の発掘調査を実施している。山根はこの遺跡の出土品を展示するために「兎塚考古館（後、村岡町歴史民俗資料館に併合）」を創設し、機関紙「土都加」も発行した〔谷渕勝1980〕。また、著書に『兎塚地方における古墳の研究』（1948年刊行）がある。但馬在住者による研究の開始であった。丹波では、前年に復活した「多紀史蹟研究会」が「篠山史談会」を吸収合併すると共に、これを発展的に解消し「多紀文化顕彰会」（会長、奥田楽々斎）と衣替えをしている。

昭和26（1951）年、摂津では尼崎市猪名寺廃寺が魚澄惣五郎・武藤誠・村川行弘によって調査され、法隆寺式の伽藍配置を確認した。但馬では、日高町祢布ケ森遺跡（平安時代）を藤岡謙二郎・桑原公徳・山田安彦（立命館大学）が調査した。翌27（1952）年、末永雅雄（関西大学）と渡辺久雄（関西学院大学）による川辺郡摂津加茂遺跡の合同学術調査が始まってくる〔末永他1968〕。播磨では、武藤誠・藤沢長治・島田清が小野市王塚古墳、さらに田岡・高井は小野市河合廃寺の調査を行った。また、増田重信が神崎町（福本遺跡）で押型文土器を採集している〔増田2007〕。

研究活動では、有年考古館が『兵庫県赤穂郡西野山第３号墳』（有年考古館研究報告１〔松岡他1952〕）を刊行している。また、日本考古学協会は『日本考古学年報』１（昭和23年度から）の刊行を始めた。兵庫県の遺跡では、尼崎市の金楽寺御厨遺跡が村川行弘により報告されている。昭和28（1953）年には、摂津の『本山村誌』が刊行された。

昭和29（1954）年、播磨では武藤・村川が龍野高校の運動場拡張に伴う龍野市西宮山古墳（前方後円墳、玄室が方形プランに近い横穴式石室）の発掘調査を行い、金製の垂飾付耳飾や装飾付須恵器などが出土し注目された。これらの遺物は、現在京都国立博物館が保管している〔八賀晋1982〕。

研究活動では、岡山県月の輪古墳の調査を契機に「考古学研究会」（『私たちの考古学』）、そして神戸大学文学部に「兵庫史学会」も発足したのである（『兵庫史学』を刊行）。また、浅田芳朗が『播磨郷土文化の研究』（創立20周年記念）を公表し、播磨では『中町誌』、但馬では『浜坂町誌』が刊行された。

戦後復興の中、播磨で浅田芳朗、今里幾次、増田重信、松岡秀夫、鎌谷木三次、赤松啓介らが、但馬に山根武、摂津に村川行弘、田岡香逸、大熊隆治ら、淡路では竹松定雄、服部久隆、丹波では朽木史郎、中野卓郎、全県的には武藤誠、高井悌三郎、島田清が調査・研究に奔走していたのである。

次いで、昭和30年代では大規模開発の始まりに伴って、調査と遺跡の保存運動が盛んになってくる。まず昭和30（1955）年、播磨では田岡・高井が加西市天神山瓦窯を調査した。翌31（1956）年、姫路市に遺跡調査会（浅田芳朗、大貫繁次、今里幾次、増田重信ら）が組織され、県に先駆けて遺跡台帳の作成が始まった。また、摂津では芦屋市山手中学の植物実習園として裏山を掘った際に、後に弥生高地性集落として大きな評価を受けた会下山遺跡（第１次調査、武藤誠・村川行弘）を発見している。

研究活動では、加西市の古家実三が中心となって「播磨郷土研究会」（『播磨郷土研究』を刊行）、淡路でも服部久隆を中心に「古代淡路顕彰会」が発足した。そうした中、特記すべきは神戸新聞社（担当、壇上重光）『祖先のあしあと』の取材と新聞連載が始まったことである。また、『芦屋市史』本編、丹波『柏原町誌』と但馬『奈佐誌』が刊行されている。

昭和32（1957）年、播磨では小野市焼山古墳群が農地開拓ためブルドーザーで破壊され、新聞などマスコミが「焼山群集墳開拓事件」として大きく報道した。三笠宮崇仁殿下が上京中の金井元彦副知事に善処を要望されたことで、県教育委員会上層部は事態の重大さを認識した。さらに、赤松啓介が中心になり、神戸大学と県内の研究団体が破壊された古墳の調査と開拓工事を中止する旨、県に申し入れを行っている。そして、県当局と協議の結果、武藤誠（県文化財保護委員、関西学院大学）を団長に調査団を編成し、第１群中の10基を発掘、他は保存に決定した。元々は、７群150基近い数の古墳群があり、大阪府イタスケ古墳に次ぐ大きな保存運動となったのである（22～25号墳の４基が、昭和37年に県指定史跡〔赤松1957〕）。

この調査には、関西圏の大学生と地元の高校生や婦人会も参加している。埋葬主体部は木棺直葬で破壊が前提であったため、調査方法をトレンチ調査ではなく、後に検証できるよう十字に畦を残し、全体を掘り下げた（奈良文化財研究所･田中琢考案）。これにより多数の木棺直葬を発見することができ、学生は木棺の掘方とは別に腐って残っていない木棺も、埋土の硬さの感触で掘る技術を会得したと聞いている。

同年、杉原荘介ら「日本考古学協会」（弥生式土器文化総合研究特別委員会）が姫路市千代田遺跡の調査（報告は『日本農耕文化の生成』1961年）を実施した。その他、増田重信の『姫路市の先史遺跡』がある。摂津では、神戸市伯母野山弥生遺跡の調査を赤松・若林泰・斎藤英二が始めている。村川行弘も、小型仿製鏡が出土した尼崎市下坂部遺跡の調査を行った。

研究活動では、『芦屋市史』資料編、播磨で『魚住村誌』、但馬で『神美村誌』が刊行された。

昭和33（1958）年、摂津では弥生時代の高地性集落である西宮市五ケ山遺跡（村川・石野博信）と、会下山の第２次調査（村川・石野）が行われた。五ケ山遺跡の調査では県内で最初の弥生時代竪穴住居跡の検出に成功し、参加した関西学院大学には「考古学研究会」も誕生した。また、会下山遺跡は昭和36（1961）年まで調査を継続し、昭和35（1960）年に県指定第１号の史跡となっている（報告書は昭和39（1964）年刊行）。そして、この調査に参加した中学生たちが「芦の芽グループ」という団体を作り、摂津地域の文化財保護に貢献していくのである。さらに、この年から伊丹市伊丹廃寺の調査が田岡香逸・高井悌三郎ら「甲陽史学会」を中心に、「伊丹史談会」（昭和25年発足）の会員らにより10年近く行われた〔田岡1959、1960〕。調査費自前の発掘であったが、大きな成果をあげ昭和41（1966）年に国指定史跡になっている（報告書は公刊〔高井他1966〕）。

播磨では、姫路市丁古墳群（上田哲也・葛野豊）や加西市周遍寺山古墳群（赤松啓介・是川長・喜谷美宣）の調査が行われた。後に、丁古墳（３次１～３号墳）では方形プラン穹窿式の横穴式石室、周遍

寺山１号墳は四隅突出形墳墓として注目されるのである。

県教育委員会は「史蹟名勝天然紀念物調査会」を廃止し、新しく「文化財保護審議会」を設置して８名の委員（史跡・埋蔵文化財は武藤誠・辰馬悦蔵）を委嘱した。高井悌三郎は「兵庫県下の古代寺院址の研究」（『兵庫史学』第17号）を発表している。また、神戸新聞社が新聞連載の『祖先のあしあと』Ⅰ（のじぎく文庫）を出版し、「姫路古代文化研究会」（松本正信ほか）が『姫路古代誌』№.１を刊行した。

昭和34（1959）年、『祖先のあしあと』Ⅱの発刊、そして神戸新聞主催の家島群島総合学術調査（考古、和島誠一・武藤誠・赤松啓介ら）も始まった（太島旧石器の鎌木義昌、真浦遺跡の近藤義郎、マルトバ群集墳の陳顕明など、昭和37年に報告書刊行）。播磨では、姫路市名古山遺跡の調査（是川長・松本・上田）が行われ、砥石に転用された全国初の銅鐸鋳型片を発見した〔上田他1966〕。また、土砂採取工事に伴って加古川市岸遺跡（是川・喜谷）の調査があり、弥生時代前期前半の土器に縄文時代晩期後半の土器が共伴するという事象を明らかにしている〔喜谷他1961〕。摂津では、芦屋市八十塚古墳群（村川・石野）や宝塚市長尾山古墳群雲雀山東支群（武藤・石野）の調査も行われた。『西宮市史』第１巻、丹波で『春日町誌』と『新井村誌』が刊行されている。

次いで昭和35（1960）年、淡路では岡本稔が初めて製塩遺跡（洲本市高崎遺跡）を発見し、海人の墓地とされる西淡町沖ノ島古墳群を金谷克己・宮崎正義・小林勝美（國學院大学）らが調査した〔岡山他1987〕。研究活動では、新見貫次を中心に岡本稔らが「淡路地方史研究会」を発足させている（1988年から『淡路地方史研究会会報』を刊行）。播磨では、小野市中番地区群集墳（田岡香逸・黒田俶正）と、浅田・今里が行った姫路市橋詰遺跡の調査が注目すべきものである。中番地区群集墳は、28基の円墳中２基が窯形粘土槨（火葬墓・カマド塚）であった〔藤岡・橋爪1969〕。『明石市史』（上巻）、但馬では『国府村誌』が刊行された。

昭和36（1961）年、播磨では赤穂市蟻無山古墳の測量調査（有年考古館）が行われ、これに是川長、喜谷美宣、上田哲也、松本正信、加藤史郎、河野通哉、松岡秀樹、村上紘揚など立命館大学を中心とした学生･OBが参加している。摂津では、村川行弘が中学校校舎増築に伴って尼崎市上ノ島遺跡の調査を行い、弥生時代前期の竪穴住居跡などを発見した。また、村川は古代・中世の遺跡として著名になった尼崎市金楽寺貝塚と、古墳時代の集落である同市若王寺遺跡の調査も実施している。

昭和37（1962）年、摂津では尼崎市水堂古墳（前方後円墳、粘土槨）の調査を村川行弘が行った。播磨では、播磨町大中遺跡が地元の中学生により発見され、同38年にかけて三次の調査（島田清・上田哲也・多淵敏樹）を実施している（昭和42年に国指定史跡、〔上田他1965〕）。建築工学が専門の多淵は、この調査を契機にして竪穴住居上部構造の復元研究を始めた。さらに、三日月町で高畑古墳群が発見され、同38年にかけて調査（島田・正木明男・伊井孝雄）を実施した。双龍環頭大刀などが出土している（平成９年県指定）。また、加古川工業用水ダム工事に伴う加古川市平荘（湖）古墳群の調査（上田・島田）も開始されている。但馬では、豊岡市妙楽寺古墳の調査（島田清）が実施された。なお、御津町では揖保川流域最大の輿塚古墳（前方後円墳）の前方部が土取り造成工事で破壊される出来事があった。

県教育委員会は、懸案であった遺跡台帳作成委員会（野地脩左委員長、正木明男専任調査員）を組織し、県下五カ国２カ年の補助金調査を開始した。また、「神戸史学会」（代表、落合重信）が『歴史と神戸』を創刊する。

昭和38（1963）年、播磨では平荘（湖）古墳群（島田・上田）と大中遺跡（島田・上田・多淵）、高砂市日笠山貝塚（喜谷・河野）の調査があり、縄文時代の人骨（高砂市教育委員会所蔵、県立考古博物

館で展示中）が発見された〔喜谷他1964〕。戦前の辻井遺跡に次いで播磨では２例目である。淡路では、洲本市下加茂岡遺跡（村川、大阪府北野高校）の調査が行われ、淡路島初の弥生時代後期の竪穴住居跡（張り床を持つ）を発見している。また、県内の若手研究者（是川長・葛野豊・多淵敏樹ら）が「兵庫県文化財問題協議会」（兵文協、事務局神戸大学工学部）を結成した。そして、年末から翌年にかけて加古川市西条古墳群の発掘に調査団を組み参加している（この中には、古墳発生前の墳丘墓として注目された西条52号墳もあった〔松本・加藤2009〕）。さらに、同会の御津町輿塚古墳の保存運動も評価すべき出来事である。

昭和39（1964）年には、神戸市桜ヶ丘で土木工事中に銅鐸14点・銅戈７点が発見された。銅鐸鋳型に次いで、特筆すべき全国版のニュースである。梅原末治・小林行雄をはじめ県文化財専門委員の辰馬悦蔵・末永雅雄・武藤誠が指導を行い、村川行弘・石野博信・赤松啓介らが調査に参加している（この調査報告書が、戦後兵庫県第一冊目のものである〔武藤他1969〕）。出土品は紆余曲折を経て、神戸市が所有する運びになった。そこで、須磨離宮公園内に市立考古館が建てられたのである。昭和45年には、一括国宝に指定された（現在は、神戸市立博物館で保管）。なお、遺跡名について、銅鐸研究第一人者の佐原眞や春成秀爾は旧地名の神岡が良いとして使用し、多少混乱も生じている。また、遺存状況の良かった神戸市生駒銅鐸も同年の発見である。芦屋市朝日ヶ丘遺跡（村川・石野）では、明確な遺構はないもののナイフ形石器や縄文時代前期の遺物が出土している。播磨では、小野市の樫山古墳群（黒田俶正・岡本道夫）や三木市高木古墳群（島田・岡本）、姫路市丁古墳群（上田）の調査が行われた。

同年、県教育委員会は昭和28（1953）年に制定した文化財保護条例を廃止し、新たな「兵庫県文化財保護条例」を制定している。播磨『三日月町史』第１・２巻と丹波『大山村誌』が発行された。

昭和30年代、行政には県教育委員会の島田清以外（昭和40（1965）年から黒田俶正と入れ替わる）に発掘を担当する職員もなく、県文化財保護審議会委員の武藤誠・高井悌三郎と、摂津の村川行弘・田岡香逸・伊井孝雄・河野通哉・石野博信・正木明男、播磨の赤松啓介・喜谷美宣・上田哲也・是川長・松本正信・葛野豊・村上紘揚・加藤史郎ら、主に高校の教員が休暇を利用して発掘調査に当たっていた。郷土史家に替わって、大学で考古学を学んだ第一世代考古学者が登場してきたのである。

開発が少なかった但馬・丹波・淡路地域では県の島田や他地域の研究者が行う数少ない調査であったが、但馬では地元の山根武や山本茂信・石田松蔵の地道な研究活動、淡路では服部久隆や新見貫次らによって「古代淡路顕彰会」・「淡路地方史研究会」が設立されている。また、丹波でも「多紀文化顕彰会」の朽木史郎・中野卓郎・杉本清一らの元で若手研究者（多紀学生郷土史研究会、宇杉幸知、酒井龍一、池田正男ら）が育っていった。なお、大規模開発に伴う調査が始まったにもかかわらず、届出の半数近くを学術調査が占めているのは意外なことであった。

## 5. 昭和40年～50年代　行政発掘の時代（Ⅰ）

昭和40（1965）年、播磨では神戸市五色塚古墳の史跡整備復元事業が始まった。事前の発掘調査は、県内の市町で最初の埋蔵文化財専門職に採用された神戸市嘱託の赤松啓介が担当（後に、喜谷美宣・奥田哲通らが加わる）している。復元整備は、完成までに丸10年の月日を要した。葺石用の玉石は40万個を購入し、整理を終えた埴輪の総数は五色塚古墳291本、小壺古墳８本であった〔丸山他2006〕。また、姫路市丁古墳群（上田）の調査も行われている。

摂津では、工業用水道園田配水場の建設工事中に尼崎市田能遺跡を発見し、調査担当者の村川行弘が

考古学協会の秋期大会（別府大学）で現状報告と調査への協力要請を行った。そのため、奈良文化財研究所を始め関東から参加した大学生も多い。また翌年にかけて、研究者だけでなくあらたに市民を巻き込んだ遺跡保存運動へ発展していくなど、文化財保護行政にも大きな影響を与えた調査となった。最終的に、一部分であるが遺跡保存が決まり、公園整備を行い資料館も開設できたのである（昭和44年、国指定史跡、〔福井他1982〕）。なお、調査成果は近畿地域で初めて発見された木棺、そして銅釧と管玉を着装した人骨と銅剣の鋳型発見などがあった。さらに、村川はこの遺跡の調査と前後して、古墳時代の渡来系の集落址である尼崎市若王寺遺跡の調査も実施している。この調査には、明治大学から福井英治が加わった。但馬では、豊岡市妙楽寺古墳（島田清・石田松蔵）や養父町石ヶ堂遺跡（鎌木義昌、奈良・平安時代）の調査が行われている。淡路では、岡本稔が北淡町育波堂の前遺跡を発見した。淡路最古の押型文土器を始めとする縄文遺跡である。播磨では、『新宮町史』第２巻が刊行された。県教育委員会では、先の正木らが最初の『兵庫県遺跡地名表』を刊行している（総遺跡数は4,783カ所）。

昭和41（1966）年、県教育委員会では社会教育課から独立した文化課が設置され、石野博信・福井英治（昭和42年に尼崎市へ）・松下勝の３名を嘱託専門職員として配置する。

調査では、播磨で近藤義郎（岡山大学）が地元の是川・松本・加藤と新宮町吉島古墳の発掘を実施した（昭和53年国指定史跡、〔近藤他1983〕）。是川・松本・加藤は、併せて新宮町宮内遺跡（昭和57年、国指定史跡）の調査も行っている。その他、明石市高丘３号窯（今里幾次・井内功）や加古川市カンス塚（喜谷美宣）、赤穂市猪壺谷縄文遺跡（松岡秀夫）の調査があった。

淡路では西淡町古津路の砂取り工事中に、13点の銅剣が発見された。神戸市桜ヶ丘遺跡に次ぐ、大量埋納青銅器の発見である。丹波では、「多紀史学会」を設立した大江道広が丹南町王地瓦窯の調査を実施した（後、県教委が第１号窯を再調査し、奈良時代後期の年代・竜円寺遺跡に供給と判明）。

研究活動では、尼崎市が『新修市史』第１巻を刊行している。

昭和42（1967）年、県教委文化課では「兵文協」の要望を受けて、大規模開発に対応するため、遺跡調査は研究者と行政機関の二者で対応する方針を決定し、「山陽新幹線･中国縦貫自動車道文化財対策審議委員会（委員長　野地脩左）」を設置し、会合を持った。この対策審議委員会は遺跡の取り扱いにも関与し、部分的ではあるが保存を図った遺跡（吉川町実楽古墳、加西市小谷遺跡、太子町川島遺跡など）も多い。なお、行政が公共開発事業を優先に考えた（記録保存）からか、昭和48年度でもって突然委員会の仕事は打ち切られた。遺跡破壊が、急ピッチで進む時代に突入していったのである。

しかし、一方では県内市町の教育委員会の協力を得て、遺跡分布調査も新たに始まった。翌年から昭和47年までに、『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第１集～９集を刊行している（遺跡数は、１万カ所を超えていった）。

播磨では、近畿最古の弥生集落とされた吉田遺跡の調査（田辺昭三）が区画整理事業に伴って始まり、住宅公団にかかる明石市高丘古窯址群の調査（大村敬通・伊藤晃）も行われた。また、揖保川町養久山墳墓群の調査（１号墳、昭和59年県指定史跡）が近藤義郎と地元研究者（是川・松本・加藤）によって行われている〔近藤他1985〕。千種町では、岡山大学和島誠一が高保木製鉄遺跡の調査を実施した〔和島1973〕。さらに、西脇市では滝ノ上古墳群の調査（絹川和明）、太子町鵤遺跡の調査（上田、古墳時代）、佐用町吉福遺跡の調査（石野・村上・伊藤・松下、古墳時代）などがあった。因みに、吉福遺跡が高校生だった筆者の最初の発掘調査現場である。淡路では、国分寺の調査（高井悌三郎）が行われている。摂津では、大学生を中心にした「武陽史学会」（機関紙、武陽史学を刊行）が設立された。村川行弘は、

一般向け田能遺跡の報告と自身の遺跡調査を回顧した著書『田能』を刊行している〔村川1967〕。筆者も、この書籍に影響された一人である。丹波では、「篠山文華学会」が発足した。播磨『新宮町史』第１巻、但馬『浜坂町史』が刊行された。落合重信は『条里制』（吉川弘文館）を刊行している。

昭和43（1968）年、文部省は文化財保護委員会を廃止し、文化庁を設置した。播磨では、加古川バイパス工事に伴って加古川市東溝遺跡（石野・松下、後溝ノ口遺跡と改称）の調査、山陽新幹線工事で太子町立岡遺跡（上田・河原隆彦）や川島遺跡（大村・櫃本ほか）などの調査が始まった。東溝遺跡は、地元小学生の協力を得て遺跡範囲を確認する水田一筆ごとの分布調査や、立看板により遺跡の経過報告を行っている。川島遺跡では、翌年にかけての調査で円形と方形の周溝墓が共存することが明らかにされた。全国初の注目される発見だった。その他、神戸市中村古墳群（大村・櫃本）や加古川市天坊山古墳（松本・加藤）、小野市大寺遺跡の調査（堀江良弘・久保田福大、奈良時代）があった。

摂津では芦屋市芦屋廃寺（村川）や川西市加茂遺跡（富田好久・亥野彊ほか、弥生時代）、淡路では洲本市大野庄慶山１号窯の調査（田辺昭三、奈良時代）が行われている。

研究活動では、芦屋市史に次いで『伊丹市史』第４巻（資料編）が刊行された。田岡香逸が『石造美術概説』（綜芸社）、渡辺久雄は『条里制の研究』（創元社）を刊行した。

昭和44（1969）年、県教委は埋蔵文化財専門職員として前記の石野（翌年、奈良県教委へ）・松下を正式採用し、そして高校教員から村上紘揚を異動させた。この年以降、過去多くても25件前後であった発掘件数が60件と大きく増加していくのである。

注目すべき調査として、播磨では渡来系の文物が多数出土した姫路市宮山古墳の発掘（松本・加藤）が行われている（昭和47年にも、新しい埋葬部が発見され再調査を実施、昭和48年県指定史跡、出土品は平成10年国重要文化財指定を受けた〔松本・加藤他1970、1972〕）。その他、新幹線関係の遺跡と第２神明道路にかかる明石市高丘19･20号窯の調査（大村・浅岡俊夫）、加古川バイパスの東溝遺跡（石野・松下）、龍野市中井瓦窯（今里幾次・井内功）の調査があった。

摂津では、新幹線関係の遺跡と伊丹市御願塚古墳の調査（高井･橋本久）、川西市加茂遺跡の調査（武藤誠・富田好久・亥野彊、弥生時代）を実施している。但馬では、日高町神鍋遺跡（藤井祐介・阿久津久）と関宮町家野遺跡（前田豊邦・高松龍暉）の縄文時代を代表する遺跡の調査があった。神鍋遺跡では前期の竪穴住居跡や集石遺構・貯蔵穴と共に、早期・前期の土器・石器が出土している。淡路では、西淡町古津路銅剣出土地の確認調査（村上・大村）を行った。あらたに銅剣１点（細形Ⅱ式）と先の銅剣に接合する破片を数点発見している〔大平・種定2009〕。

同年、神戸市大歳山遺跡の保存を巡って遺跡を破壊するブルドーザーの前に座りこんだハンストの学生を、開発業者が要請した機動隊によって排除した「大歳山事件」が発生している。さらに、日本考古学協会の大会（平安博物館）では、協会解体を叫ぶ学生の乱入によって中止となり、翌年の総会・大会も中止されている。大学紛争に端を発した学生運動が、考古学の世界にも大きく影響した時代である。

また、兵庫県陶芸館がオープンし「古丹波と県下の古陶」展が開催された。有年考古館は『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』を報告している。播磨では、『小野市誌』と『志方町誌』の刊行があった。

昭和45（1970）年には、川西市加茂遺跡のほぼ中央部を調査もしないまま、都市計画道路を建設したことから、「加茂遺跡を守る会」が結成され住民監査請求が行われた。しかし「請求の理由なし」との判断が下され、同会は神戸地裁に工事差し止め訴訟を起こしている（10年後に和解）。保存運動に力を発揮した「兵文協」もこの年で開店休業し、そのまま消滅してしまった。研究者の多くが、行政内考古学者

に取り込まれたのも原因の一つであろう。県教育委員会には、文化財第２係（埋蔵文化財担当、嘱託を含め技術職員８名）が設置された。

県教委は中国縦貫自動車道（神戸市北区の遺跡）と山陽新幹線の調査、神戸市は西神ニュータウン造成工事に伴う発掘調査と役割分担が始まり、山陽新幹線工事で神戸市新方遺跡などが発見されている。注目される遺跡は、摂津の尼崎市中ノ田遺跡（勇正弘･橋詰康至ほか、弥生時代）、川西市加茂遺跡（武藤・富田・亥野ほか、弥生時代）、播磨では県教委（民間の開発であるが、姫路市には専門職員不在のため）が対応した姫路市横山古墳群（村上紘揚・輔老拓治）と八代山古墳群（大村・阿久津）の調査があった。横山７号墳は、４世紀初頭の前方後円墳である。また、中国縦貫自動車道に伴う加西市小谷遺跡（磯崎正彦）、新幹線に伴う太子町立岡遺跡（櫃本・山本）の調査が行われた。小谷遺跡では方形の竪穴住居跡などを発見し、初期須恵器が出土している。但馬では、日高町山の宮遺跡（阿久津久・和田長治、縄文時代）、関宮町家野遺跡・杉ヶ沢遺跡（高松・前田、縄文時代）の発掘があった。さらに、この年度末には県教委が報告書を刊行することの不可能な遺跡調査に対して、集報という形態で対応を始めている。良く考えた救済方式と言えよう（昭和54年、第４集まで刊行）。

研究活動では、兵庫県史編集専門委員会の「考古学から見た兵庫県の原始・古代」（『兵庫県の歴史』第４号）が掲載された。浅田芳朗は、和田千吉小伝『人見塚の家』を刊行している〔浅田1970〕。筆者世代が、和田千吉を知る機会となった好書である。新見貫次の『淡路史』、『三木市史』も刊行された。

昭和46（1971）年、県教育委員会は本年から48年に再び分布調査を行い、『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第１分冊～第３分冊を刊行した。

摂津では、尼崎市東園田遺跡（武藤・橋詰、弥生時代）、川西市勝福寺古墳（富田・亥野）、宝塚市平井古墳群・堂坂遺跡（高井・葛野）の調査が行われている。勝福寺古墳は、この調査結果で円墳２基と判断された（後、大阪大学の調査で再び前方後円墳で、後円部に二つの横穴式石室を持つことが明らかになった）。堂坂遺跡は、中世の埋納銭遺跡である。播磨では、上郡町中山古墳群が保存運動の後、松岡秀夫により発掘調査されている（県指定などで残した４基以外のもの、11号墳は有年考古館前に移築）。また、姫路バイパス建設に伴う姫路市長越遺跡（鎌木義昌・岡山理科大学、49・50年には県教委が調査を引き継ぐ）と、兼田遺跡（村上・大村、古墳時代）の調査が始まった。長越遺跡では播磨地域の弥生時代後期から古墳時代前期（弥生土器～土師器）の編年基準となる資料と、全国的に最古段階の石製模造品が出土している〔松下他1978〕。その他、中国縦貫自動車道加西市以西、姫路市権現遺跡（松下・山本、弥生時代）、神戸市西神ニュータウンに伴う天王山古墳群（河野・喜谷）などの調査がある。

但馬では、国道９号線バイパス建設に伴って櫃本誠一・山本三郎が和田山町池田古墳（但馬最大の前方後円墳）と城の山古墳の調査（三角縁神獣鏡が出土、第２図）を実施した。池田古墳は橋脚で飛ばし、城の山古墳はトンネル工法で保存措置を講じている〔櫃本他1972〕。また、城の山古墳出土品は国の重要文化財に指定された。その他、村岡町文堂古墳（山根武）の調査が行われ、保存状態の良好な装飾大刀が出土している。丹波では丹南町西山北古墳（遠藤順昭）、淡路では一宮町明神古墳群（阿久津・小川良太）の発掘があった。

研究活動では、『伊丹市史』第１巻と『芦屋市史』（本編）、『八鹿町史』（上巻）、『揖保川町史』の刊行があった。さらに、岡本稔・波毛康宏らが「淡路考古学研究会」を設立（『淡路考古学研究会誌』）した。余談であるが、この年に筆者は東京の國學院大学に入学する。学生運動の最後の頃で、関東では行政が行う調査に参加すると、先輩方に開発の片棒を担いだとして非難されたものである。

昭和47（1972）年は、奈良県高松塚古墳で壁画が発見されたことから、全国的に空前の考古学ブームが起きた。摂津では尼崎市武庫庄遺跡（武藤・橋爪、弥生時代）、川西市加茂遺跡（富田好久・田中達夫ほか、弥生時代）、宝塚市雲雀山古墳群（武藤・葛野）、芦屋市朝日ヶ丘遺跡（藤井祐介、縄文時代）や、三田市の青磁窯（大村敬通、江戸時代）の調査が行われ、三田市北摂ニュータウン内の発掘調査も始まった。播磨では、県教委が中国縦貫自動車道宍粟・佐用間の遺跡調査、姫路市八幡遺跡（阿久津久・藤井祐介）、加西市まんじゅう古墳（堀江良弘・久保田福大）、太子町黒岡山墳墓群（上田）、新宮町宮内遺跡（松本・加藤、弥生時代）の調査が行われた。

淡路では洲本市武山遺跡を岡本稔が発見し、丹波では整備のための市島町三ツ塚廃寺跡（高井・橋本・和田晴吾、昭和51年国指定史跡）や城東町藤岡山遺跡（中野卓郎・藤井祐介、旧石器・縄文時代）の調査が行われた。藤岡山遺跡では尖頭器や削器、縄文後期の遺物を出土している。但馬では、山東町中山古墳群（櫃本・小川）、豊岡市女代神社遺跡（山根武・瀬戸谷皓、弥生時代）、大屋町上山高原遺跡（前田豊邦、縄文時代）の調査が実施されている。

研究活動では石田松蔵が『但馬史』１を発表し、『黒田庄町史』も刊行された。

昭和48（1973）年、県教委は中国縦貫自動車道（宍粟・佐用間）などに対応するため、４名を増員し（井守徳男・池田正男・岡﨑正雄・吉田昇）係長以下13名の体制になる。この年から、姫路市も専門職員２名（山本博利・秋枝芳）を採用した。淡路では、洲本市武山遺跡の調査を田辺昭三・丹羽佑一が行った。縄文土器と共に、淡路で初めて弥生時代の方形周溝墓を発見している。

また、播磨では中国縦貫道に伴う佐用町本位田遺跡（輔老・井守、弥生・古墳時代）、南光町西下野タタラ跡（村上・池田、奈良時代）、安富町安富中学校前東遺跡（山本・岡﨑ほか、江戸時代）の調査が行われた。西下野遺跡は、県内で最古の製鉄遺跡である。そして、神戸市吉田遺跡（田辺・奈良大学）、姫路市国分寺台地遺跡（磯崎・大阪学院大学、弥生・古墳時代）の発掘もあった。国分寺台地遺跡では、弥生中期の方形周溝墓や古墳時代の埋甕遺構を検出している。小野市でも高井悌三郎を調査団長に、保存目的の広渡廃寺跡の調査（薬師寺式伽藍配置、昭和55年国史跡に指定）が行われた。但馬では城崎町二見谷古墳群（櫃本・小川、昭和50年県指定史跡）と、日高町但馬国分寺跡（高井・吉田恵二・櫃本）の調査があった。国分寺跡では、塔跡と金堂跡の一部を検出している。

研究活動では、鎌谷木三次が『播磨出土漢式鏡の研究』を出版した。

昭和49（1974）年には、県が播磨町大中遺跡史跡公園「播磨大中古代の村」を開園した。ここには、年間５～６万人の人が訪れている。播磨では、山陽新幹線工事に伴って龍野市門前遺跡（上田哲也、弥生・古墳時代）が発掘された。一宮町の圃場整備では伊和遺跡（村上紘揚）が調査され、竪穴住居跡から石製模造品と鉄製品が出土している。また、加古川市砂部遺跡（上田・中溝康則）でも石製模造品が確認された。神戸市では、堅田神社古墳群（河野・喜谷）の調査を行った。姫路市では多田廃寺跡（松本・加藤）を発掘している。

但馬では、豊岡市教委が大森神社古墳や妙楽寺墳墓群（瀬戸谷）、日高町で但馬国分寺跡（櫃本・小川）、同町祢布ヶ森西遺跡（櫃本・小川、後に但馬国府関連と判明する官衙跡）、そして竹野町鬼谷遺跡（瀬戸谷）で但馬最古の古墳時代窯跡を調査している。その他、関宮町では小路頃才ノ木遺跡（高松・前田、縄文時代）、香住町では南住遺跡（中村典男・味田晃・瀬戸谷、中世）を発掘した。

研究活動では、『兵庫県史』第１巻と『川西市史』第１巻、『洲本市史』が刊行された。原始・古代はやはり考古学の成果が大きい。櫃本誠一は、「兵庫県下における前方後円墳」（『兵庫県埋蔵文化財調査集

報』第２号）を発表している。また、三村秀弘・西坂義雄・上月昭信らが播磨・志方町の分布調査を実施し、その報告を行った（『古代の志方』）。神戸古代史研究会（代表、真野修）は『神戸古代史』創刊号を刊行した。松本正信と加藤史郎は『土に埋もれた文化財』を発表している。

このように、昭和40年代は学術調査に係るものが激減し、大半が開発工事に対応する調査となった。開発工事の種別は宅地造成工事、農業基盤整備が増加しており、次いで区画整理工事、道路・鉄道工事、土取工事などとなっている。大規模開発事業に伴って破壊された遺跡も多いが、埋蔵文化財の保存を求める研究者や学生・地域住民による保存運動を展開した結果、大中遺跡・田能遺跡・伊丹廃寺などが国指定史跡となって保存されてきたのである。こうした中、記録保存が前提であった池田古墳と城の山古墳は開発者側と調整し、調査担当者が事業地内に残した稀有な例である。また、阪神間では新たに市史の刊行が始まってきた。

また昭和40年代は、県教委の石野博信・松下勝・村上紘揚・伊藤晃（後、岡山県教委へ）・大村敬通・阿久津久（後、茨城県教委へ）・櫃本誠一ら、神戸市・尼崎市・姫路市・豊岡市・村岡町などにも専門職員が採用され、行政が対応を始めた時期でもある（大学で考古学を学んだ研究者の多くが、行政考古学の第一世代になる）。これに県文化財保護審議会委員の武藤誠・高井悌三郎と、摂津の村川行弘・田岡香逸・伊井孝雄・河野通哉・葛野豊・藤岡弘・勇正弘、播磨の上田哲也・是川長・松本正信・加藤史郎・松岡秀樹・堀江良弘・久保田福大、丹波で亥野彊・富田好久・遠藤順昭・駒井功・中野卓郎、但馬の山根武・岡本久彦・味田晃・高松龍暉・和田長治や県外の研究者の田辺昭三・鎌木義昌・磯崎正彦・前田豊邦らが行政の不足分と学術調査に当たっていた。

当時、筆者は大学紛争の影響により考古学実習が行われなかったため、各地の教育委員会が行う調査に参加していた。発掘は大型重機を使用せず人力掘削のみで行い、ベルトコンベヤーの導入前は掘った土をバラさずいかに遠くへ飛ばす技や、一輪車で走って運ぶ（ネコ押し）作業を競ったものである。

次いで昭和50（1975）年、県教委の文化財課が文化財保護課に改正され、文化財２係は係長以下13名の職員が配置された。また、職員の中から松下・櫃本・山本・井守らが「兵庫考古研究会」を立ち上げ、『兵庫考古』の冊子を発行している。神戸市では、五色塚古墳の復元整備工事が完了した。

摂津では川西市加茂遺跡（田中達夫、弥生時代）、西宮市苦楽園五番町古墳群（武藤誠・勇正広・藤岡弘）、神戸市箱木千年家前庭遺跡（多淵敏樹・喜谷・宮本郁雄ほか）の調査が行われた。また、伊丹市伊丹城・有岡城跡（鈴木充・橋本久ほか）の調査が始まっている。播磨では神戸市の養田中ノ池遺跡（喜谷・中村善則ほか、弥生時代の高地性集落）、元住吉山遺跡（河野通哉）、吉田南遺跡（田辺昭三、弥生・古墳・奈良時代）、姫路市長越遺跡（松下・岡﨑）、太子町立岡遺跡（輔老・西口和彦）の調査があった。丹波では、山南町丸山古墳群（山本・井守・吉田）の発掘を実施した。丸山１号墳は全長48mの前方後円墳で、後円部に２基の竪穴式石室、前方部に３基の埋葬施設を持っている。但馬では、日高町但馬国分寺跡（櫃本・池田ほか）、豊岡市鎌田古墳群や下陰古墳群（瀬戸谷・味田晃）の調査が行われた。その他、村岡町文堂古墳と八幡山古墳群が県指定史跡になっている。八幡山古墳群は、「竪穴系横口式石室」と呼ばれる構造で、特に５号墳は「三角持送り式天井」という特殊な構築である。また播磨地域と同様に、圃場整備に伴う調査も始まってきた。

研究活動では、『宝塚市史』第１巻と播磨『佐用町史』（上巻）、淡路『北淡町誌』、丹波『氷上町誌』と『青垣町誌』が刊行された。また、神戸古代史研究会が『神戸古代史』第２巻第１号、神戸新聞社は『兵庫探検・歴史風土編』を発行。松岡秀夫・秀樹が『古代農業生産の発展過程』を発表している。

昭和51（1976）年、県教委の文化財保護課が社教・文化財課に名称変更する。併せて、文化財２係も埋蔵文化財係に変更した。西宮市では、初代の県文化財保護審議会委員を務めた辰馬悦蔵が「辰馬考古資料館」を開設している。

摂津では伊丹市伊丹城跡・有岡城跡（鈴木・橋本ほか）、同市原田西遺跡（小川・吉田、弥生時代）、芦屋市山芦屋古墳（藤岡弘・勇ほか）、西宮市老松古墳（藤岡・勇ほか）の調査が行われた。播磨では、県内初の木簡が出土した神戸市吉田南遺跡（田辺昭三、古墳時代・奈良時代）、加古川市砂部遺跡（上田ほか、弥生・古墳時代）、姫路市上原田遺跡（輔老・西口、奈良時代）、山崎町千本屋廃寺（高井悌三郎・五十川伸矢・中田興吉）の調査があった。その他、赤穂市で松岡秀夫がお地蔵さんとして祭られていた扁平鈕式銅鐸の鋳型を発見している〔松岡1976〕。但馬では豊岡市高屋窯跡（石田松蔵･瀬戸谷ほか、江戸時代）、養父町市夜ヶ谷遺跡（瀬戸谷、平安時代）の調査が行われた。丹波では、篠山市寺内廃寺（井守・池田）の調査も始まっている。

研究活動では、『芦屋市史』資料編と『川西市史』第４巻（資料編）、『日高町史』上巻が刊行された。

昭和52（1977）年、県教育委員会は埋蔵文化財担当として県事業の三田市青野ダム関連で８名の新規採用（吉識雅仁・水口富夫・加古千恵子・森内秀造・岡田章一・渡辺昇・深井明比古・大平茂）を行い、22名の大所帯となった（この年から、勤務地が神戸市王子分館になっている）。オイルショック後で県職員全体でも80名程度の採用なのに、１割が埋文と驚いた記憶がある。これ以降、発掘調査は大半が行政主体となり、この年を境に70～80件の発掘届出件数が三桁に上がっていった（播磨52件、但馬13件、丹波４件、摂津45件の内半数が青野ダム、淡路２件）。なお、これ以降の調査は、件数も増えたため時代別に記述していきたい。

まず、縄文時代では但馬の浜坂町池ヶ平遺跡（大村・岡﨑）、播磨の太子町東南遺跡（三村修次）、同神崎町福本遺跡（岡﨑・吉識）の調査がある。東南遺跡では、埋設土器や土坑を確認した。

弥生時代では、摂津の川西市加茂遺跡（田中達夫・岡野慶隆、平成12年国史跡）と淡路の洲本市下内膳遺跡（岡本稔ほか）で方形周溝墓を発見している。但馬の八鹿町米里遺跡（松下・井守）と但東町奥藤遺跡（大村・波毛康宏）でも円形周溝墓が見つかった。播磨の揖保川町袋尻・浅谷遺跡（松本・加藤）では壺棺と土壙群が認められた。また、摂津の神戸市桜ヶ丘B地点遺跡（奥田哲通）では、銅鐸発見場所の近くから中期後半の竪穴住居跡や壺棺・木棺墓を確認している。

古墳時代では、摂津の三田市西山６号墳（藤井祐介・高島信之）で金銅製の冠、同市奈良山古墳群（藤井・高島）に終末期の横口式石棺が見つかっている。その他、丹波の篠山町葭池北遺跡（池田・渡辺昇）では木製品や建築用材を発見した。但馬では、豊岡市七ツ塚古墳群（瀬戸谷）の発掘があった。

奈良・平安時代では、但馬の日高町国分寺跡（岡﨑正雄・加賀見省一）で県内２例目の木簡が出土した。なお、同寺跡には店舗の建設計画が出され、急遽史跡の仮指定の措置を行っている。また、播磨の明石市吉田南遺跡（田辺昭三）は奈良・平安時代の遺構が多く発見され、明石郡衙の可能性が出てきた。

中世以降では、明石市明石城跡（松下・山下俊郎）や姫路市御着城跡（山本・秋枝）の調査があった。また、丹波焼の窯跡今田町三本峠北窯の灰原（大村・波毛）調査が行われ、操業開始期が13世紀初頭まで遡ることが明らかにされている。

研究活動では、瀬戸谷皓を中心とした「但馬考古学研究会」が発足（『但馬考古学』を発刊）している。藤原清尚は、加古川市山之上遺跡採集の旧石器を報告（『山之上遺跡Ⅰ』）した。武藤誠は『兵庫県の古社寺と遺跡』、『宝塚市史』第４巻（資料編）、播磨『山崎町史』が刊行されている。また、神戸市立考

古館が『古代のまつり展』を開催した。

昭和53（1978）年には、淡路縦貫自動車道建設に伴う調査（西淡町志知川沖田南遺跡）も始まってきた。この年から、県教委と市町教委の役割分担（国事業と県事業に伴うものは県、市町と民間工事に伴うものは市町対応）に基づき、市町職員も急激に増加していくことになった。

旧石器では、播磨の志方町岡山遺跡（山中一郎、奈良大学）の調査。縄文時代では、太子町東南遺跡（岡﨑・深井明比古）の調査が行われ、竪穴住居跡や配石遺構を発見した。

弥生時代では、播磨の神戸市常本遺跡（西岡巧次・菅本宏明）で竪穴住居跡（前期を含む）を検出している。同市池上口ノ池遺跡（田辺昭三、奈良大学）では、中期の竪穴住居跡以外に古墳時代初頭の焼失竪穴住居跡51棟が検出され、邪馬台国との関係で大きく注目された。同市吉田南遺跡（田辺）も、弥生時代より古墳時代の集落跡と奈良以降の掘立柱建物、そして木橋が周知されるようになった。摂津では、北摂ニュータウン内の鉄製品で注目される奈カリ与遺跡（井守・水口・渡辺）の調査が始まった。

青銅器関係では、但馬の日高町久田谷で５～10㎝ 大に破砕された銅鐸117片（突線鈕式）が圃場整備工事で出土した。銅鐸の最終段階を考える上で、興味深い資料となっている。

古墳時代では、丹波の丹南町大滝２号墳（富田・亥野・勇、前方後円墳）が調査され、重圏文鏡や鉄製工具の出土があった。但馬では、和田山町筒江中山古墳群（小川・岡田章一）の調査が行われ、23号墳では長大な組合式木棺内に内行花文鏡や鉄製品が副葬されていた。摂津の三田市では、青野ダム郡塚窯跡（井守）を発掘している。末古窯址群中の最古の窯である。

奈良・平安時代では、郡衙とされる東浜谷遺跡が丹波の篠山町で発見された。圃場整備に伴って、高杯など３点に「郡」と刻印された須恵器が出土している。但馬の日高町姫谷遺跡でも圃場整備工事中に縄文の玦状耳飾と共に、県内初となる木製模造品（人形・馬形・鳥形・斎串）が発見された。

中世以降では、但馬の村岡町福西砦跡（中村典男・西口和彦）や摂津の三田市釜屋城（井守・水口・渡辺）の調査を行っている。

研究活動には、間壁忠彦・間壁葭子の『日本史の謎・石宝殿』がある。

昭和54（1979）年、県内の埋蔵文化財専門職員が50名を超える（加西市、西脇市、龍野市、加東郡、宍粟郡などで新採用）。調査も200件に近づいている。最も多いのが、圃場整備などの農業基盤整備事業である。大型開発事業は山陽新幹線･中国縦貫道に替わり、山陽自動車道、そして北摂･西神･北神ニュータウンの調査が増えてきた。個人住宅関係では、摂津の川西市加茂遺跡の調査が相変わらず多い。

旧石器・縄文時代では、播磨の神崎町福本遺跡（岡﨑・深井）で早期の土器と共に石核・フレイク、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡（深井ほか）、赤穂市堂山遺跡（山本ほか）で後期の土器が出土した。一宮町森添遺跡（垣内章）で中期末の竪穴住居跡を確認している。

弥生時代では、先の福本遺跡で中期の竪穴住居跡12棟が発見され、板状鉄斧が出土した。同じく播磨の川島遺跡では、河川改修中に家・鹿などの線刻絵画土器を中学生が採集している。摂津では、三田市奈カリ与遺跡（櫃本･井守・山本・吉識・大平）の調査が継続中で、15棟の竪穴住居跡が段状遺構と共に発見されている。但馬では、和田山町片引遺跡（松下・渡辺）で前期の土器が大量に出土した。

古墳時代では、播磨の神戸市天王山４号墳（喜谷）が調査され、２号棺から八禽鏡・ガラス玉などが出土した。墳丘には、庄内式の土器を検出する。加西市では、玉丘古墳外堤部の調査（立花聡）が行われた。但馬では、豊岡市北浦古墳群の調査（瀬戸谷）が始まった。地山をカットした低墳丘の古墳が多い。村岡町三の谷２号墳で、横穴式石室の壁面に騎馬像や木の葉などの線刻画が発見された。また、同

町長者ヶ平１・２号墳（中村典男）では圃場整備に伴う調査を行い、２号墳（７世紀前半）の横穴式石室内から蓮華を描いた石片を発見した。注目すべき出土品である。集落跡では、淡路の洲本市下内膳遺跡（浦上雅史）や摂津の川西市栄根遺跡（岡野）、先の福本遺跡などで竪穴住居跡が確認されている。

奈良・平安時代では、摂津の神戸市郡家大蔵遺跡（喜谷）で奈良時代の大型掘立柱建物が検出された。地名からも菟原郡衙と推定できる。播磨では、滝野町下ノ山遺跡（森下大輔）で勧学院領滝野荘に関連する遺構が調査された（後に、この前身とされる上滝野・宮ノ前遺跡が発見される）。姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡（岡﨑･深井）には、木製人形などの発見があった。窯跡では、播磨の相生市緑ヶ丘窯跡（西口･森内秀造）で５基の窯跡が調査された。奈良末～平安時代の椀を主に焼いている。

中世以降では、赤穂市堂山遺跡（山本・大平）で全国初の塩田跡調査が行われた。防潮堤を造り、内側の自然浜を埋めて平坦面を造成し、その上に粘質の細砂を敷いて塩田地盤とし、沼井と呼ばれる濃い塩水を得る装置を作っている。窯跡では、東播系須恵器と称される明石市魚住窯跡（大村・水口）の調査も始まった。その他、明石城跡（松下・加古）、御着城跡（秋枝・山本）、姫路城武家屋敷跡（松下・岡田）が発掘されている。そして、過去の調査成果から、有岡城跡の主郭の一部が国指定となった。

研究活動では、石野博信編の『縄文時代の兵庫』と山根・瀬戸谷・中村編の『原始古代の但馬』、『龍野市史』第１巻、『夢前町史』、『家島町誌』、『三原郡史』が刊行された。また、魚住窯の調査中には『魚住古窯ニュース』を発行している。

昭和55（1980）年、縄文時代では摂津の芦屋市山芦屋遺跡（森岡秀人）が調査された。特に、早期の細分可能な土器群資料が注目できる。また、播磨の一宮町福野遺跡（垣内章）では後期の石囲い炉を持つ竪穴住居跡が２棟発見された。その他、姫路市今宿丁田遺跡（秋枝・山本）で後期・晩期の土器、丁・柳ヶ瀬遺跡（輔老・深井）で晩期の土器、摂津の伊丹市口酒井穴森遺跡（浅岡）でも晩期の突帯文が出土し、弥生時代前期との関係で今里幾次の説が実証追認されている。

弥生時代では、摂津の伊丹市口酒井穴森遺跡（浅岡）で前期の木棺墓・土壙が発見された。川西市栄根遺跡（岡野・池田正男）でも中期の方形周溝墓が見つかっている。三田市の奈カリ与遺跡（櫃本・井守・大平）では、竪穴住居の他に井戸を検出した。中期後半の高地性集落である。播磨では、神戸市の新方遺跡（丸山潔）で中期前半の貼石を行った周溝墓が発見された。姫路市の丁・柳ヶ瀬遺跡（深井）では、前期の彩文土器と木製の彩文鉢が見つかった。丹波では、春日町七日市遺跡（村川行弘）で中期の方形・円形周溝墓が調査された。また、姫路市今宿丁田遺跡（秋枝・山本）では銅鐸の鋳型片（偏平鈕式）とフイゴ・鉱滓が出土した。千種町岩野辺でも銅鐸片（突線鈕式）が見つかっている。

古墳時代では、播磨の高砂市経塚山古墳（真野修、前方後円墳と判明）と姫路市兼田古墳群（松本・加藤）が調査されている。丹波では篠山町前山古墳（大槻伸、竪穴式石室）、但馬では豊岡市立石古墳群と亀ヶ崎古墳群（瀬戸谷）、出石町田多地経塚・古墳群（小川・森内）の発掘が行われた。後期古墳では龍野市長尾タイ山古墳群（上田・是川ほか）が調査され、横穴式石室の１号墳から馬形埴輪や馬鐸･装飾付須恵器などの貴重な遺物が出土した。その他、芦屋市八十塚古墳群･城山古墳群（森岡ほか）、但馬の八鹿町夕垣古墳群（小川・吉識）がある。次に、集落関係では但馬の出石町六方川河床遺跡（瀬戸谷）で前期の土器が大量に出土した。播磨では、社町家原堂ノ元遺跡（吉識・森下）で竪穴住居跡７棟などが発見された。溝の周辺からは、石製模造品が出土している。淡路では、西淡町志知川沖田南遺跡（松下・水口）で県内初の水田跡（畦畔）と足跡を検出した。

奈良・平安時代では、加古川市西条廃寺（西口・岡田）、加西市繁昌廃寺（高井悌三郎）、中町多哥廃

寺（水野正好）、丹南町竜円寺廃寺（池田正男）の調査がある。多哥廃寺は飛鳥時代から白鳳時代にかけての古い寺と判明した。窯跡では、明石市魚住窯跡（大村・水口）や龍野市大陣原古窯跡（吉田・種定淳介）、相生市緑ヶ丘古窯跡（吉田・森内）が調査されている。

中世以降では、西脇市緑風台古窯跡（岸本一郎）が発掘された。分焔柱を持つ保存状態の良い窯で、その後県指定になっている。城跡では、三田城跡（櫃本・森内）、小野市小田城跡・豊地城跡（西田猛）、叶堂城跡（松下・水口）の調査が行われた。

研究活動では、『尼崎市史』第11巻（資料編）、但馬の『日高町史』資料編、『村岡町誌』上巻、『香住町誌』が刊行された。『旧石器考古学』21には、播磨の特集が組まれた。また、県教委がまとめ役となって市・町を含めた『兵庫県埋蔵文化財調査年報』の刊行が始まった。発掘調査の情報公開という点で、誠に意義深いものであった。さらに、今里幾次が著書『播磨考古学研究』により、神戸史学会賞を受賞されている。

昭和56（1981）年、調査件数は220件に増加したが旧国別に見ると、摂津・播磨で８割近くを占めている。県内の担当職員（豊岡市・加古川市・氷上郡・西紀丹南町などで新採用）は61名になった。

縄文時代では、摂津の伊丹市口酒井遺跡（浅岡）で晩期の溝が発見された。

弥生時代では、同じ伊丹市原田西遺跡（加古・森内）の調査で中期の方形周溝墓が見つかっている。播磨では、西脇市ハゼノ木遺跡（岸本）に５回以上の建替えがあった竪穴住居跡や、内部に壺類を充満させた特殊土坑がある。小野市船木高町遺跡（西田）では、後期の竪穴住居跡が３棟と壁面が焼けた土坑を発見している。焼土坑は煮炊き施設の可能性が高い。但馬では、豊岡市亀ヶ崎遺跡（瀬戸谷・潮崎誠）が調査された。投弾用の川原石などを持つ、但馬地域で発見された初の高地性集落である。丹波では春日町野々間遺跡で銅鐸が発見され、その調査中（種定淳介）にもう１点銅鐸を発見している。

古墳時代では、播磨の神戸市出合遺跡群（鎌木義昌）の調査中に、削平された出合１号墳（亀塚古墳）を発見した。埴輪を持つ６世紀前半の帆立貝形前方後円墳である。社町名草古墳群（森下）では、横穴式木室墳（カマド塚）が見つかっている。県内では、小野市の中番古墳群と共に注目される地域である。但馬の豊岡市北浦古墳群（瀬戸谷・潮崎）では、古墳に伴う階段状の遺構や横穴が発見された。同市カチヤ古墳（山本・渡辺）では組合せ式箱式石棺（陰石）を調査し、棺内外から副葬品が出土している。また、集落関係では摂津の神戸市松野遺跡（千種浩ほか）が調査され、柵に囲まれた豪族居館跡（掘立柱建物）を発見している。淡路では、西淡町沖田南遺跡（松下・水口）で前期の水溜を持つ水田跡が調査された。なお、この調査から県の調査では自然地理学者（高橋学）の参加が始まり、花粉分析（藤原宏志、松下まり子）なども行われるようになった。

奈良・平安時代では、姫路市本町遺跡（秋枝・山本）で掘立柱建物跡や井戸跡を発見し、播磨国府に比定された。神戸市出合遺跡（鎌木）では、大型掘立柱建物群が見つかり、明石郡衙（吉田南遺跡）に通う人の邸宅かと考えられている。また、神戸市滝ノ奥遺跡（森田稔）で寺院跡と経塚が発見された。その他、加古川市札馬古窯跡（岡本一士・中村浩）、神戸市神出古窯跡（丹治康明）の調査も始まった。

中世以降では、姫路城武家屋敷跡（松下・岡田ほか）、書写坂本城跡（秋枝・山本）、篠山城跡（池田正男・大槻伸）の調査が行われている。坂本城跡では堀内から備前・瀬戸や中国製の陶磁器と共に出土した、柿経が注目される。

研究活動では、兵庫考古研究会が『兵庫県考古学関係文献目録』を発行した。浅田芳朗は『図説播磨国風土記への招待』を刊行する。考古学が、「風土記」研究に益するところ大であることを一般に知ら

しめた良書である。『赤穂市史』第１巻、『豊岡市史』上巻が刊行された。但馬考古学研究会も『よみがえる古代の但馬』を刊行している。また、鎌谷木三次が播磨古代史研究の三部作（寺院址・漢式鏡・古文化財）で神戸史学会賞を受賞された。

昭和57（1982）年、県教委では淡路縦貫道・山陽自動車道・近畿自動車道舞鶴線建設に伴って職員８名（村上泰樹・市橋重喜・別府洋二・岸本一宏・村上賢治・西口圭介・平田博幸・山下史朗）を増員し、28名になった。県内の担当職員数も76名となり、発掘届出件数が300件を超えた。圃場整備事業が30％、道路建設が25％、宅地造成に伴うものが18％で約７割を占める。ちなみに、こうした原因者負担の経費も10億円を超え、県教委では発掘作業の効率化をはかるため遺物包含層までの土は重機を使用して掘削するようになった。

縄文時代、播磨の加美町熊野部遺跡（神崎勝）で中期末の竪穴住居跡、加美町寺の下遺跡（神崎）で晩期の竪穴住居跡を２棟確認している。龍野市片吹遺跡（市村高規）では、縄文後期を中心に７棟の竪穴住居跡を発見した。但馬の日高町神鍋遺跡（加賀見省一）では中期初頭の集石遺構を見つけている。

弥生時代では、神戸市頭高山遺跡（菅本宏明）で中期後半の高地性集落を調査した。磨製石剣が出土している。同市新方遺跡（丹治康明）で中期の木棺墓から人骨を発見した。加古川市砂部遺跡（岡本）では、前期後半の竪穴住居跡と共に稲藁を使用した土坑（土器焼成坑）を検出している。龍野市養久乙城山遺跡（深井・市橋、高地性集落）では、尾根の先端に竪穴住居跡を２棟発見した。淡路の洲本市大森谷遺跡（松下・別府洋二ほか）では後期の竪穴住居跡８棟を確認している。

古墳時代では、神戸市東求塚古墳（渡辺伸行）が調査され、４世紀後半代の前方後円墳と明らかになった。龍野市竜子向イ山古墳群（渡辺・村上賢治）では５基の横穴石室が調査され、１・２号墳から火葬骨が発見された。年代は、６世紀末から７世紀初頭である。丹波の春日町多利・向山古墳群（加古・岸本一宏）では、玄室が方形プランの横穴式石室を発見している。また、宝塚市中山荘園古墳（直宮憲一・古川久雄）が調査され、多角形古墳であることが判明した（後に、国指定史跡）。集落跡では、神戸市新方遺跡（丹治）で中期から後期にかけての竪穴住居跡を発見した。多量の臼玉や管玉の未製品（滑石）が出土し、県内初の古墳時代玉造遺跡（工房跡）と確認された。先の砂部遺跡（岡本）では、掘立柱建物と共に韓式土器も出土している。渡来系のムラなのであろう。

奈良・平安時代、姫路市辻井遺跡（秋枝・山本）では掘立柱建物や井戸が発見され、木簡・墨書土器の出土から「草上駅家」説が有力になってきた。加古川市西条廃寺（西口・岡本）では、東西約80m・南北約100mの寺域の伽藍配置が明らかにされた。神戸市神大病院内遺跡（多淵敏樹、後に楠･荒田町遺跡と改称）では、13世紀前後の二重濠を発見している。福原京（平氏）関連かと推測された。

中世以降では、龍野市福田片岡遺跡（岡﨑･西口圭介ほか）、伊丹市有岡城跡（鈴木充･浅岡俊夫）の調査が行われている。福田片岡遺跡は、鎌倉から室町時代の堀や掘立柱建物・井戸を発見し、「播磨国鵤荘絵図」との関係が注目された。

研究活動では、県教委が『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』、櫃本誠一と瀬戸谷皓は『日本の古代遺跡兵庫北部』を刊行する。丹波・但馬地域の考古学（遺跡）案内書である。また、赤松啓介が『赤松啓介著作集』により神戸史学会賞を受賞している。その他、神戸市の市立博物館が開館した。

昭和58（1983）年、神戸市・篠山町・八鹿町に職員採用が行われ、県内の専門職員数は82名となった。県教委の調査は、前年と同様に淡路縦貫道・近畿道舞鶴線・山陽自動車道・太子龍野バイパスが中心であった。そして、同年姫路市に県立歴史博物館が開館している（埋文担当者を３年交代で常置）。

縄文時代では、神戸市宇治川南遺跡（丹治・池野素子）で早期から晩期までの継続した土器を確認した。同市篠原遺跡（多淵）には晩期の土器棺と集石遺構、土偶・石刀などの祭祀遺物が発見された。その他、赤穂市堂山遺跡（松岡ほか）と、新宮町香山遺跡（松本・加藤）に後期の土器が出土している。

弥生時代では、神戸市玉津田中遺跡（山本・山下史朗）の調査が本格化した。伊丹市原田西遺跡（森内・別府洋二）では中期の方形周溝墓、神戸市郡家遺跡（森田）に後期の円形周溝墓が発見された。また、頭高山遺跡の調査も継続中。淡路では森遺跡・鈩田遺跡・寺中遺跡が調査（小川・吉識・岸本）され、鈩田遺跡に仿製内行花文鏡が出土した。また、寺中遺跡では後期の方形周溝墓を確認している。

古墳時代では、播磨香寺町の法花堂２号墳（松本・加藤）が調査され、甲冑のセットが出土した。龍野市中井古墳群（井守・渡辺）では装飾大刀が発見された。摂津では、芦屋市八十塚古墳群（森岡）や宝塚市中山荘園古墳調査（直宮憲一）があった。丹波では、雲部車塚古墳の周庭帯の調査（山本明彦）、西紀町上板井古墳群（池田･村上泰樹・市橋）と経塚の調査、沢の浦古墳群（池田・村上・市橋）の調査が行われている。沢の浦古墳群では銀象嵌の大刀、砲弾形の陶棺が発見された。但馬では、豊岡市深谷古墳群（瀬戸谷・潮崎）や出石町田多地古墳群と経塚（森内・別府）、八鹿町箕谷古墳群（谷本進・藤原弘幸）などの調査があった。特に、箕谷古墳群では紀年銘大刀（戊辰）の出土が注目される。集落関係では神戸市郡家遺跡、また祭祀関係の芦屋市三条岡山遺跡（村川）が調査され、三条岡山遺跡では子持勾玉に鉄製品が伴う貴重な発見があった。窯跡では、龍野市中井窯跡（井守・渡辺）と明石市鴨谷池古窯跡（山下俊郎・鋤柄俊夫ほか）の調査が行われている。

奈良・平安時代では、「里長」の館として注目を集めた丹波の春日町山垣遺跡（加古・平田博幸）の調査があった。堀内からは大量の木簡や墨書土器が出土している。西紀町の西木之部遺跡（池田･村上･市橋）でも、緑釉・灰釉土器・土馬などの発見があった。但馬の豊岡市福成寺遺跡（潮崎）は木簡・硯・石帯などの出土から、「城崎郡衙」と推定された。播磨では加古川市石守廃寺（岡本）、加西市殿原廃寺（立花）、西脇市野村廃寺（岸本）、姫路市辻井廃寺（秋枝・山本）の調査が行われている。

中世以降では、伊丹市有岡城跡（浅岡）、明石市太山寺遺跡（植山茂）、龍野市宝林寺北遺跡（渡辺）、春日町多利前田遺跡（加古・平田）、養父町新宮山経塚（西口・水口）や先の上板井経塚・田多地経塚の調査があった。その他、中町石垣山遺跡（山仲進・神崎）では銅精錬の遺構が調査されている。

近世では、姫路城跡（秋枝・山本）、生野町生野代官所跡（田畑基）、山崎町鹿沢城跡（垣内）、西淡町叶堂城跡（西口・水口）の調査があった。

研究活動では、播磨の『千種町史』が刊行された。但馬考古学研究会は、『但馬古代史の謎を探る』を刊行している。

翌昭和59（1984）年には、明石市魚住分館に仮住まいしていた県の埋蔵文化財部門が、神戸市兵庫区荒田町に移転した（平成元年から、教育委員会事務局の地方機関・埋蔵文化財調査事務所となる）。

旧石器・縄文時代では、県内で初めて姶良・丹沢火山灰層を基準に本格的な旧石器の調査が、丹波の春日町七日市遺跡と篠山町板井寺ケ谷遺跡において行われた。七日市遺跡（井守・久保弘幸ほか）では火山灰層の下層からチャートを主体とした石器が約5,000点、板井寺ケ谷遺跡（水口・市橋・岸本・山口卓也）では火山灰層の上・下の層からチャート製とサヌカイト製の石器が約3,500点出土している。

龍野市北沢遺跡（上田哲也ほか）では、晩期の土器棺・配石墓などを検出している。伊丹市森本鶴田遺跡（橋本久・浅岡）では、後期から晩期の遺物包含層の調査が行われた。その他、淡路の西淡町谷町筋遺跡（吉識・西口圭介）でも後期の土坑と縁帯文の一括土器を発見した。

弥生時代では、神戸市玉津田中遺跡と春日町七日市遺跡の調査が行われた。玉津田中遺跡（山本･加古・中川渉）は中期の方形周溝墓と竪穴住居跡・水田跡・蛸壺を入れた土坑、そして大量の木製品を発見している。七日市遺跡（井守・種定ほか）では、中期（円形）から後期（方形）の竪穴住居跡52棟、碧玉製管玉・ガラス小玉を持つ木棺墓、土製勾玉・剣形・陽物などが見つかった。洲本市の寺中遺跡（吉識・西口）では昨年の周溝墓に続いて、中期後半と後期の竪穴住居跡を確認した。西淡町谷町筋遺跡（吉識・西口）でも後期の竪穴住居跡を発見している。神戸市北青木遺跡（小川・山下）では、前期前半の土坑･溝が見つかった。弥生開始期の吉田遺跡や上ノ島遺跡と同じ性格の遺跡であるが、国道２号より南の砂堆で発見された意義は大きい。神戸市西神65地点遺跡（千種浩･谷正俊）では、中期の高地性集落を調査している。揖保川町半田山墳墓群（渡辺・岡田）では、前期の土器棺と後期末の墳丘墓を調査した。１号墓からは、小型仿製鏡が出土している。

古墳時代では、神戸市五色塚古墳濠外の調査（渡辺・森田）、加西市玉丘古墳でも外堤の調査（立花）が行われた。但馬では大屋町田和古墳（前田豊邦）が調査された。第２主体から石枕と琴柱形石製品が出土した。後期古墳では、神戸市舞子古墳群（口野博史）や姫路市西脇古墳群（渡辺・別府）、豊岡市大師山古墳群（潮崎）などの調査が行われた。大師山古墳群は、開口部を山側に持つ竪穴系横口式石室の古墳が多い。地名の「加陽」からも渡来系氏族の墓と考えられる。集落関係では、神戸市郡家遺跡（西岡巧次）で中期から後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡やフイゴ羽口などが見つかった。滝野町河高上ノ池遺跡（森下）では、竪穴住居跡から人形・勾玉・鏡などの土製模造品（５世紀代）が出土している。従来の土製模造品の年代よりも古くなることから、注目を集めた。

奈良・平安時代では、加古川市石守廃寺（岡本）、新宮町香山廃寺（松本・加藤）の調査が行われた。官衙関係では、但馬の日高町川岸遺跡（加賀見）で木簡・木製人形などの国府関連の祭祀具が出土した。丹波の七日市遺跡（井守・村上賢治）では、掘立柱建物や墨書土器・木製人形などが発見されている。郡衙に関係する遺構･遺物であろう。芦屋市寺田遺跡（片岡肇･南博史）でも掘立柱建物や和同開珎を発見し、官衙の存在が指摘された。淡路の三原町では、淡路国分寺（高井悌三郎・森郁夫・西口）の調査が始まった。神戸市神大病院内遺跡（西口・山田清朝）では、13世紀前後の溝や柱穴を発見している。福原京関連かと推測される。

中世以降では、龍野市福田片岡遺跡（岡﨑・平田・別府）で堀に囲まれた室町時代の掘立柱建物跡や井戸が発見された。また、「播磨国鵤荘絵図」に記載のある「筑紫大道」が明らかにできた。丹波の西紀町西木之部遺跡（輔老・村上泰樹・平田）でも、「宮田荘」に関連する掘立柱建物跡や溝が調査されている。神戸市玉津田中遺跡（山本・加古・中川渉）では、堀に囲まれた掘立柱建物跡、庭園跡、小鍛冶跡などが調査された。特に、庭園遺構は注目されるものである。近世では、赤穂城跡（鈴木充・宮崎素一）や姫路城跡（秋枝・山本）の調査があった。

研究活動では、神戸新聞社から『兵庫県大百科事典』が刊行された。考古学に関する項目も多い。また、櫃本誠一と松下勝が『日本の古代遺跡兵庫南部』を刊行する。播磨・淡路地域の考古学（遺跡）案内書である。『龍野市史』第４巻（資料編）、『赤穂市史』第４巻（資料編）、『相生市史』第１巻、『ふるさと安富』、『加美町史』、『出石町史』第１巻、『温泉町史』第１巻、『山東町誌』（上巻）が刊行された。

昭和60（1985）年では、県内調査担当者が100名に達し、発掘届出件数も300件を超えた。地域別では淡路を除き、ほぼ均等の数字となっている。時代別では、旧石器・縄文を除くとこれも大差なく、わずかに古墳･中世が多い程度である。なお、中世以降の調査が約１/３を超えたのは、城館跡・荘園遺跡が

多い兵庫県の特徴を示すものであろう。

旧石器時代では、昨年に引き続き丹波の春日町七日市遺跡（井守・藤田淳ほか）が調査され、２面の文化層を検出している。近畿・瀬戸内では稀な大規模調査で、石器群の編年に重要な資料を提供した。三田市溝口城遺跡の調査（山下秀樹・鈴木忠司・南博史）でも、大量の旧石器（鉄石英・チャートなど）が出土している。

縄文時代では、神戸市玉津田中遺跡（山本・藤田・甲斐昭光・篠宮正ほか）で二条の突帯文土器と弥生前期前半の壺が河道中から共伴して出土している。伊丹市口酒井遺跡（橋本・浅岡）でも、晩期突帯文の土器が良好な状態で発見した。三田市対中遺跡（深井・別府）では、弥生前期後半の溝内から晩期の突帯文土器が出土した。

弥生時代では、神戸市楠・荒田町遺跡（丹治）で前期末から中期初頭の貯蔵穴16基を調査した。先の対中遺跡（深井・別府）では、前期の井堰を検出している。前記の神戸市玉津田中遺跡では、中期の方形周溝墓と竪穴住居跡・水田跡などが発掘されている。佐用町長尾・沖田遺跡（大平・村上賢治）では、中期から後期の木棺墓・土壙墓39基を検出した。春日町国領遺跡（吉識・村上泰樹）では、後期後半の竪穴住居跡16基を調査した。２号住居からガラス小玉60点が出土している。播磨町大中遺跡（池田・市橋）では、竪穴住居跡を25棟以上確認し、そのうち１棟を発掘した。ベッド状遺構を持つ後期の住居跡である。西紀町内場山城跡（岡﨑・中川ほか）の山裾では、後期後半の墳丘墓やガラス製管玉を持った木棺墓が調査されている。

古墳時代では、摂津の芦屋市金津山古墳（森岡）で、周濠の調査が行われた。幅は４ｍ以上、周濠内出土の円筒埴輪から５世紀後半の築造と判明している。神戸市西求塚古墳（渡辺・千種）では竪穴式石室の上から、山陰系の土器がまとまって出土した。同市住吉宮町遺跡（西岡誠司・山本雅和）では、後期初頭の埋没した方墳（一辺10m前後）11基を確認している。播磨では、西脇市岡ノ山古墳の測量調査（岸本）が行われ、全長約52m前方後円墳であることが明らかになった。一宮町では伊和古墳群（垣内・片山昭悟）が調査された。１号墳は全長62mの前方後円墳であり、方格T字鏡・玉類・竪櫛・大刀類が出土している。豊岡市ホウジ谷古墳群（宮村良雄）では、１号墳（木棺直葬）の副葬品として鉄鎚・鉄鋏などの鍛冶工具が出土している。西紀町箱塚古墳群（岡﨑・市橋ほか）では、４号墳が群中最古のもので、円筒埴輪・装飾付須恵器・特殊偏壺を発見している。三田市の高川古墳群（中川・藤村淳子ほか）で、横穴式石室から銀象嵌大刀が出土した。また、姫路市西脇古墳群（吉田・西口圭介）では７世紀初頭から中頃にかけての、無袖横穴式石室や小竪穴式石室の円墳21基を調査している。豊岡市正福寺古墳群（宮村良雄）では、横穴墓を発掘した。集落関係では、神戸市森北町遺跡（黒田恭正）で前漢鏡の破鏡や韓式土器を発見した。淡路の西淡町雨流遺跡（長谷川真・高瀬一嘉ほか）では中期の竪穴住居跡や水田跡・河道を検出し、子持勾玉・製塩土器・鍛冶滓などが出土している。淡路の拠点集落の一つになる遺跡である。芦屋市月若遺跡（森岡）でも、大溝から子持勾玉を発見した。

奈良･平安時代では、龍野市小犬丸遺跡（山下･山上雅弘）で道路跡（山陽道）と井戸跡を検出し、井戸周辺から木簡・墨書土器（駅、布勢井邊家など）・木製馬形などを発見した。全国で、初めて駅家跡と判明した遺跡である。姫路市辻井遺跡（秋枝・山本）では、河道跡から木簡と人形・馬形・舟形など木製祭祀具が出土した。先の長尾・沖田遺跡では、条里制に伴うと考えられる道路跡と側溝を検出した。溝から、木簡・斎串･墨書土器などが出土している。伊丹市緑ヶ丘遺跡（村川・橋本・浅岡）では、奈良時代の掘立柱建物と鍍金青銅製の鉸具を発見した。伊丹廃寺に関係した遺跡であろう。但馬では、日高

町深田遺跡・カナゲ田遺跡（吉識・山田）で但馬国府関連の多量の木製品（木簡・人形・馬形・独楽・算木・檜扇・挽物など）を発見した。「八丁路説」の範囲である。その他、朝来町釣坂遺跡（田畑基）で木製祭祀具が出土している。また、窯跡関連では三田市相野古窯跡群（木戸窯―岡﨑・藤村、西谷池窯―大平・村上賢治）が調査された。神戸市神出古窯跡（神崎・徳原多喜雄・山仲）では、粘土採掘坑と考えられる土坑54基を確認した。

中世以降では、中町奥中･三内遺跡（神崎･徳原･山仲）で掘立柱建物４棟が発見されている。龍野市宮脇遺跡（森内・平田・西口ほか）では、掘立柱建物・土壙墓などが調査された。城館関係では、伊丹市有岡城跡（橋本・浅岡）、川西市山下城跡（田中達夫）、相生市感状山城跡（河原隆彦・西口和彦）、八鹿町小佐城館跡（谷本進）、西紀町内場山城跡（岡﨑ほか）などが発掘されている。

近世では、姫路城跡（秋枝・山本）、赤穂城跡（鈴木充・広山尭道・宮崎素一）、明石城武家屋敷（山下俊郎・田村誠人）、三木新城跡（毛利哲夫・松村正和）の調査が行われている。また、三田市下相野窯跡（大平・村上）で近世丹波焼の物原の一部が調査された。

研究活動では、神戸市内で埋蔵文化財研究会の第19回集会が開催された。テーマは「海の生産用具」である。近藤義郎・渡辺誠の講演と西日本各地14カ所の発表（兵庫県　市橋重喜）があった。神戸古代史研究会が『神戸古代史』第３巻第１号、播磨『一宮町史』が刊行されている。

以上、昭和50年代の調査は役割分担に伴って国･県事業の道路建設･大型宅地造成工事などを受け持った県教委と神戸市が大規模・大型化し、また主に住宅建設及び農地関係開発を抱えた市郡町教委が小型化し発掘調査件数は増加するという二極分化が進んだ。特に、県教委の調査は重機の使用も進み、請負工事化されてくる。さらに、調査件数が増えた阪神地域では民間の調査機関（妙見山麓遺跡調査会、六甲山麓遺跡調査会、淡神文化財協会など）も登場してきた。

一方、県教委では昭和50年代半ばから奈良国立文化財研究所の協力を得て、窯跡や・古墳周濠の電気探査・磁気探査などの地中探査を進めてきた。さらに、昭和60年からは金属製品・木製品の保存処理（担当、加古）も始まった。他県に先駆け、これを取り入れた西口和彦の業績（篠山市王地瓦窯など）、加古千恵子の業績（多利・前田遺跡など）も評価しなければならない。

## 6. 昭和61年～平成時代　行政発掘の時代（Ⅱ）

平成時代に入ると、２（1990）年には担当者も150名になり、発掘届出件数は1,000件を超えた。まさにうなぎのぼりの数字である。時代別に見ると、調査件数の約７割が奈良時代以降の歴史時代に属する遺跡調査である。また、平成５（1993）年には県内の総遺跡数が25,000カ所になった。

各年度の代表的な調査遺跡名・出土品を挙げると、昭和61（1986）年には日高町祢布ヶ森遺跡の県内初の漆紙文書、昭和62年は春日町国領遺跡の縄文時代草創期の土坑と有舌尖頭器などの石器群、昭和63年は神戸市大開遺跡の弥生前期の環濠集落と赤穂市有年原・田中遺跡の弥生後期の円形墳丘墓、そして出石町入佐山古墳群（３号墳）の埋葬主体部から出土した砂鉄。平成元（1989）年は神戸市玉津田中遺跡、御津町権現山51号墳、春日町七日市遺跡、出石町砂入遺跡。同２年は出石町袴狭遺跡、和田山町向山古墳群。同３年は明石市吉田南遺跡、三木市久留美窯跡。同４（1992）年は尼崎市田能高田遺跡、淡路町塩壺西遺跡。同５年は出石町袴狭遺跡、姫路市太市中古墳群。同６年は出石町入佐川遺跡、加古川市中谷窯跡群・投松窯跡群。同７年は淡路町丸山遺跡、太子町亀田遺跡、小野市勝手野古墳群。大半は淡路縦貫道・山陽自動車道と円山川水系の小野川放水路事業に伴うものである。なお、小野川放水路に

伴う出石町の確認調査で木製模造品（人形）を地下２m以下から探し当てた西口圭介の執拗さに敬服する。この発見がなければ、袴狭遺跡群の調査もなかったのである。また、昭和63年から県教委が行った「生産遺跡調査（製鉄遺跡・製塩遺跡他）」と平成２年からの「歴史の道調査（山陽道他）」も注目すべき成果をあげている。

右肩上がりの調査に加え、平成７（1995）年に起きた阪神・淡路大震災の復興調査が調査件数の増加に拍車をかけた。同８年には県教委だけでも237件、このうち104件が復興調査で、調査面積は併せて24万㎡を発掘した。なお、平成７～９年の三カ年の復興調査には、１都２府33県４政令指定都市から派遣を受けた94名の調査員に支援をいただいている。感謝しなければならない。

さらに、平成10（1998）年には県内の調査担当者も200人を超えた（うち、県教委が50名）。この辺りが県内の遺跡発掘調査のピークだった。その内訳は、但馬地域の播但連絡自動車道・丹波地域の北近畿自動車道春日和田山線、そして神戸国際港都建設に伴う土地区画整理事業が主なものである。

こうした県教委の調査も平成13（2001）年には調査面積が10万㎡を切り、翌14年から５万㎡に落ち込むと共に、埋蔵文化財の啓発普及を業務とする普及活用班が生まれてくる。これが、考古博物館設立につながっているのである。平成15（2003）年の総遺跡数は、28,000カ所となっている。この時期の調査では、氷上町市辺遺跡・和田山町茶すり山古墳を始めとする北近畿自動車道春日和田山線が主要なものだった。茶すり山古墳は、平成16年国指定史跡となっている。記録保存が前提の発掘調査でも、遺跡が残せる時代になったのである。それ以降では、平成21（2009）年からの朝来市池田古墳の再調査が注目される。周濠内の東西渡り土堤と東造り出し周辺から出土した23体もの水鳥形埴輪は圧巻であった。

さらに、平成19（2007）年には播磨町に県立考古博物館がオープンし、埋蔵文化財調査事務所もここに統合された。学芸課では、国庫補助を受けて学術調査（古代山陽道と駅家）も実施されるようになった。喜ばしいことである。また、平成22（2010）年兵庫県で初めて日本考古学協会の大会が、考古博などを会場に開催されたことも記しておきたい。一方、課題としては埋蔵文化財担当職員の高齢化（現役の調査員が４名も亡くなっていることを含む）と資格制度や、開発者サイドからの発掘調査担当者（県･市･町教委所属）人件費負担などがあがっている。なお、予定頁数を越えたため、この時期（平成時代）の調査概要は省略した（実際は、調査件数もその内容も県教育委員会が発行した報告書を見れば分かるように、平成12年までが最盛期、実に膨大な資料なのである）。次の機会を期したい。

## 7. 兵庫県内の重要遺跡とその出土品

ここでは、まとめにかえて時代別に遺跡種別・主要な遺跡と出土品を記してみたい。

**旧石器時代**では始良･丹沢火山灰層の上下から丹波市で２カ所の遺跡（七日市遺跡、板井寺ヶ谷遺跡）が見つかった。チャート製を主体とするナイフ形石器が出土している（ただし、板井寺ヶ谷遺跡の上層はサヌカイト製）。その他、摂津では三田市溝口遺跡、播磨ではたつの市揖保川町に碇岩遺跡と終末期の明石市西脇遺跡の発見があった。旧石器時代終末から縄文時代にかけての遺跡には丹波市国領遺跡があり、小形の有舌先頭器が出土している。

**縄文時代**では、早期に但馬の養父市別宮家野遺跡で平地の住居跡・配石群・焼土坑が発見され、摂津では芦屋市山芦屋遺跡に押型文土器が層位的に検出されている。播磨には、神崎町の福本遺跡がある。前期では、但馬豊岡市神鍋遺跡に方形竪穴住居跡・貯蔵穴・集石（焼けた石）土坑、摂津の神戸市雲井遺跡には屋外炉の発見があった。淡路では洲本市武山遺跡に遺構の発見はなかったものの、多量の前期

土器が出土している。中期では、但馬の養父市小路頃才ノ木遺跡に楕円形の竪穴住居跡、播磨の多可町熊野部遺跡に不整方形の竪穴住居跡、たつの市片吹遺跡で楕円形の竪穴住居跡が発見された。後期では、淡路の淡路市佃遺跡に円形平地住居跡・貯蔵穴・土器棺などを確認した。土偶・石剣なども出土している。播磨では、太子町東南遺跡に竪穴住居跡・土壙墓・配石土坑・埋甕など、宍粟市福野遺跡と森添遺跡で隅円方形の竪穴住居跡を発見した。福野の住居は、石囲い炉を持っている。晩期では、摂津の神戸市篠原遺跡で土器棺墓・集石遺構、播磨の姫路市辻井遺跡でも土器棺墓、多可町寺の下遺跡で楕円形の竪穴住居跡が見つかっている。その他、稲作との関係で注目される摂津の伊丹市口酒井遺跡や、播磨の姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡がある。人骨は姫路市辻井遺跡（中期）と、高砂市日笠山貝塚（晩期？）で発見があった。なお、県内瀬戸内側では貝塚が非常に少ない状況にある。

**弥生時代**では、前期に摂津の尼崎市上ノ島遺跡で竪穴住居跡や鋤・鍬などの木製品が多量に見つかっている。尼崎市東武庫遺跡では、前期の方形周溝墓群が検出された。神戸市の北青木遺跡でも、砂堆上に土坑・溝が発見された。同市大開遺跡では環濠集落、戎町遺跡では水田跡、楠・荒田町遺跡では炭化米・ドングリなどの残った貯蔵穴が確認されている。播磨では、神戸市の吉田遺跡、そして玉津田中遺跡で円形の竪穴住居跡・土器棺・方形周溝墓群・水田跡を発見した。また、同市新方遺跡では、木棺墓に３体の人骨が残っていた。いずれも石鏃を射込まれた状態で、縄文人の特徴を多く持つ人たちだった。加古川市の美乃利遺跡でも水田跡が検出された。姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡では、遺構は検出していないものの、土器と木製品に見るべきものが多い。さらに注目されるのは、加古川市砂部遺跡の土器焼成坑である。淡路では、洲本市安乎間所遺跡に環濠が確認されている。

中期では、摂津の川西市加茂遺跡に環濠と竪穴住居跡・方形周溝墓など、尼崎市田能遺跡で竪穴住居跡・木棺墓・土壙墓などが発見された。加茂遺跡には方形区画内に首長居館と考えられる大型建物があり、田能遺跡では木棺墓に632個の碧玉製管玉を持つ。尼崎市武庫庄遺跡には、大型掘立柱建物跡が検出されている。ヒノキ材柱痕の年輪年代からは、辺材部分を考慮して紀元前168年の伐採年がでた。本例や大阪府池上曽根遺跡の例から、中期後半の定点は確実に紀元前に遡ることになった。神戸市雲井遺跡では方形周溝墓を発見した。また、芦屋市会下山遺跡を始めとする高地性集落が西宮市五ケ山遺跡、神戸市伯母野山遺跡、三田市奈カリ与遺跡などで発見され、鉄製品（鉄斧・鉄鏃など）が出土している。

播磨では、神戸市玉津田中遺跡、新方遺跡で竪穴住居跡・周溝墓・水田跡が調査された。玉津田中遺跡は木製品や石器（石包丁）の生産、蛸壺漁、新方遺跡では碧玉を使用した玉造も行っている。高地性集落では、環壕を持つ神戸市の表山遺跡と頭高山遺跡がある。加古川市では溝ノ口遺跡、姫路市では市之郷遺跡、今宿丁田遺跡、名古山遺跡、国分寺台地遺跡、西脇市のハゼノ木遺跡、太子町川島遺跡と亀田遺跡、たつの市の清水遺跡と新宮・宮内遺跡、赤穂市東有年沖田遺跡などに円形の大型竪穴住居跡がある。国分寺台地遺跡と川島遺跡、新宮・宮内遺跡、東有年沖田遺跡には周溝墓も存在した。その他、たつの市養久山・前地遺跡には絵画土器と水銀朱精製臼の出土がある。家島町の男鹿島では、大山神社遺跡が奈カリ与遺跡に似た丘陵の谷部を利用した高地性集落を形成している。

但馬では朝来市仲田遺跡で竪穴住居跡、養父市米里遺跡に円形周溝墓が発見された。豊岡市には、高地性集落の亀ヶ崎遺跡がある。丹波では春日町の七日市遺跡に竪穴住居跡・周溝墓、篠山市桂ヶ谷遺跡で竪穴住居跡・土坑が確認されている。淡路では洲本市武山遺跡に方形周溝墓、下加茂遺跡で水田跡・周溝墓を発見した。洲本市下内膳遺跡は方形周溝墓と大量の土器があり、この時期の拠点集落と言える。

後期では、摂津の尼崎市田能遺跡に終末期の方形周溝墓、神戸市深江北町遺跡に円形周溝墓を検出し、

神戸市森北町遺跡には竪穴住居跡がある。三田市では、川除・藤ノ木遺跡に多数の竪穴住居跡と円形周溝墓を発見している。播磨では、神戸市玉津田中遺跡がこの時期に環濠を造った。また、同市池上口ノ池遺跡では終末期の隅丸方形と方形焼失住居跡を多数検出した。姫路市市之郷遺跡では、円形周溝墓を発見した。加東市の家原堂ノ元遺跡で円形と方形の竪穴住居跡、播磨町大中遺跡と三木市西ケ原遺跡に多角形と方形のベッドを持つ竪穴住居跡を確認した。さらに、赤穂市有年原・田中遺跡には突出部を持つ円形の墳丘墓（特殊器台・壺、大型装飾高杯）、加古川市西条52号墓やたつの市半田山墳墓群と養久山墳墓群、そして綾部山39号墓では鏡を持つ墳丘墓を発見している。

但馬では、朝来市大盛山遺跡に二重の環壕で囲まれた高地性集落が確認された。また、同市宮ノ本遺跡では竪穴住居跡と方形周溝墓があり、住居跡では碧玉を使用した玉造も行われている。同市梅田東墳墓群では、鉄剣の他ガラス製小玉･管玉を持つものがあった。丹波では、篠山市桂ヶ谷墳墓群がある。淡路では、洲本市寺中遺跡に円形の竪穴住居跡と方形周溝墓、同市大森谷遺跡で円形の竪穴住居跡が発見されている。同市下内膳遺跡では方形住居跡、南あわじ市の鈩田遺跡には円形と方形の竪穴住居跡がある。淡路市では、明石海峡を望む位置に塩壺遺跡・塩壺西遺跡（大型鉄鏃が出土）が造られた。さらに、同市五斗長垣内遺跡では発見された23棟のうち12棟で、鉄器作り（鍛冶工房）を行っていることが注目された。鉄製品（鉄斧）のほか、金床石や砥石・石槌が出土している。また、洲本市の二ツ石戎ノ前遺跡で水銀朱やベンガラの精製、淡路市今出川遺跡では製塩が行われていた。

次に、青銅器は神戸市桜ヶ丘銅鐸・宝塚市中山銅鐸など合計61点の銅鐸､神戸市玉津田中遺跡・古津路銅剣・姫路市魚吹八幡神社蔵など合計33点の銅剣・銅戈・銅矛がある。これらの中には、調査で発見された丹波市野々間銅鐸と南あわじ市幡多行當地遺跡銅戈などがある。銅鐸は全国一の出土量であり、鋳型も姫路市名古山遺跡・今宿丁田遺跡、赤穂市上高野など４遺跡に発見例がある。また、集落跡では中国製の鏡片が神戸市森北町遺跡・吉田南遺跡・大中遺跡など３例、小型仿製鏡が神戸市篠原遺跡・長田神社境内遺跡・上沢遺跡・松本遺跡・表山遺跡・青谷遺跡・玉津田中遺跡・新方遺跡などに見られる。

**古墳時代**では、まず播磨の姫路市長越遺跡が注目される。弥生時代末期から古墳時代前期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、大溝跡などがある。この大溝は、水路（港）として機能したのであろう。出土遺物の中には、他地域の土器と共に最古段階の石製模造品があり、倭政権の関与があったのは間違いない。中期以降は、隣接の畑田遺跡･小山遺跡に戻るようである。一方、同市市之郷遺跡は中期から後期に造られた集落である。竈を持つ竪穴住居跡や、掘立柱建物跡が見つかっている。注目できるのは、韓式土器の出土である。同市国分寺台地遺跡では、中期の方形竪穴住居跡と須恵器大甕を埋めた土坑群がある。同市東前畑遺跡では中期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、祭祀土坑（石製模造品）を検出した。石製模造品の玉造も行っている。加西市小谷遺跡には方形竪穴住居跡があり、初期須恵器などを出土した。神戸市出合遺跡では、中期から後期の竪穴住居跡が20数棟確認された。出土遺物には、韓式土器や初期須恵器・石製模造品などがある。また、同市新方遺跡と上脇遺跡でも中期から後期の竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群があり、新方遺跡では石製模造品の製作も行っている。上脇遺跡には、韓式土器・製塩土器・石製模造品が出土した。その他、赤穂市の有年原･田中遺跡と上郡町竹万宮ノ前遺跡、たつの市竹万遺跡と加古川市の砂部遺跡でも韓式土器や初期須恵器を発見している。竹万と砂部には石製模造品もある。さらに、佐用町には金子遺跡など、『播磨国風土記』以前の製鉄に関係する遺跡の存在が考えられる。

摂津では、神戸市松野遺跡が注目できよう。柵列に囲まれた中期末から後期の掘立柱建物群である。豪族居館であり、宮本長二郎は神殿と捉えた。居館外にも竪穴住居跡と掘立柱建物が発見され、石製模

造品が多量に出土した。近隣の上沢遺跡にも竪穴住居跡と掘立柱建物があり、大壁造建物や韓式土器・石製模造品を発見している。同市郡家遺跡や宅原遺跡でも、中・後期の竪穴住居跡と掘立柱建物が検出された。郡家では子持勾玉を始め、多数の石製模造品が出土している。尼崎市の若王寺遺跡では前期に集落（井戸）が始まり、中期から後期にかけての掘立柱建物を検出した。出土遺物には羽口・鉄滓などがあり、鉄鉱石を材料とした大鍛冶（精錬）・小鍛冶（鋼作り、製品作り）を行った遺跡と考えられる。また、出土品には石製模造品・土製模造品などがある。三田市では終末期の下西山遺跡に竪穴住居跡・掘立柱建物跡が発見され、鍛冶に関わる遺物（羽口・椀形鉄滓・砥石）が出土した。近くには、渡来系の要素となる窯跡（平方窯跡）・横穴式木室墳（平方１・２号墳、西山２・７・13・18号墳）も築かれた注目すべき地域である。

但馬では、朝来市柿坪遺跡の大型掘立柱建物群と竪穴住居群が重要である。中期の企画的に配置された豪族居館（四面庇付き建物）であり、初期須恵器・角杯・製塩土器などが出土した。同市加都遺跡・粟鹿遺跡でも、多数の竪穴住居跡が発見されている。同市筒江浦石遺跡では、前期の粘土採掘坑が検出された。豊岡市五反田遺跡では、中期から後期の農具を含む木製品が多量に出土した。ここでは、滑石製の琴柱形石製品･有孔円板もある。また、筆者は同市入佐川遺跡周辺に入佐川遺跡の出土遺物から豪族居館の存在を考えている。香美町には小田池遺跡（初期須恵器）、タツケ平遺跡（石製模造品）がある。丹波では、篠山市桂ケ谷遺跡や灰高遺跡に、後期の掘立柱建物や竪穴住居跡が確認された。丹波市市島町の梶原遺跡では、終末期の竪穴住居群がある。住居の角の地山を掘り残して竈を築く「青野型住居」が、注目できる。

淡路では、南あわじ市の木戸原遺跡を注目したい。豪族居館とされる大型掘立柱建物群と竪穴住居群に、韓式土器・鉄鋌・石製模造品などの祭祀具が伴っている。従来から、淡路地域は中期の大型古墳が認められず、倭政権の直轄地とされてきた。大和もしくは河内から、派遣された人たちの集落であろう。同市雨流遺跡でも竪穴住居跡・掘立柱建物跡、鍛冶工房関係の遺構と水田跡を検出している。その他、同市志知川沖田南遺跡では前期の水田跡、洲本市森遺跡には中・後期の竪穴住居跡がある。淡路の特色である製塩遺跡には、淡路市釜口浜田遺跡・引野遺跡・貴船神社遺跡などがあり、中期の引野遺跡の頃に脚台のない丸底の土器に変化している。

次に、古墳は前期のものに、摂津では神戸市処女塚古墳（前方後方墳）･西求女塚古墳（前方後方墳）・東求女塚古墳（前方後円墳）・ヘボソ塚古墳（前方後円墳）、宝塚市万籟山古墳（前方後円墳）・安倉高塚古墳（「赤烏七年」銘鏡）など学史的にも著名なものが多い。近年発掘された西求女塚古墳は、前方後方墳ではなく前方後円墳と判明し、鏡も三角縁神獣鏡を含む12面が出土した。年代は３世紀の後半（250～260年）とされる。この古墳が古墳時代の開始年代を３世紀中頃に押し上げたのである。また、墳丘が1596年の「伏見地震」で崩れたことも明らかにされている。

播磨では、西から三角縁神獣鏡を持つたつの市吉島古墳（前方後円墳）・権現山51号墳（前方後方墳）がある。権現山は特殊器台形埴輪も併せ持ち吉備に近い様相を示し、一方吉島は畿内色の古墳である。そして、同市養久山１号墳と姫路市瓢塚古墳（前方後円墳、国史跡）が見られる。瓢塚は前方部が撥形に拡がる箸墓古墳の相似形墳で、竹管によるスタンプ文の施された壺形土器が採集されている。加古川市では褶墓を含む日岡山古墳群（前方後円墳）、神戸市には白水瓢塚古墳（前方後円墳）と堅田神社境内１号墳（方形墳）がある。その他、宍粟市の伊和中山古墳群と西脇市岡ノ山古墳などがある。

但馬では、豊岡市に森尾古墳（長方墳）・小見塚、朝来市に城の山古墳（円墳）が造られている。森

尾では３基の石室があり、「正始元年」銘の三角縁神獣鏡・「新作大鏡」銘の三角縁神獣鏡・方格規矩鏡が発見された。城の山は長大な箱形木棺内の、頭部分に方格規矩鏡・斜縁四獣鏡・唐草文鏡の鏡と石釧など石製品・鉄剣が置かれ、足元に三角縁神獣鏡３面があった（第２図）。他に、豊岡市入佐山３号墳があり、頭付近に砂鉄を持つことが注目された。丹波では、丹波市の丸山１号墳（前方後円墳）と親王塚古墳がある。親王塚は三角縁神獣鏡を持っていた。淡路では、唯一洲本市コヤダニ古墳から三角縁神獣鏡が出土しているが、詳細は明らかでない。この他、内行花文鏡を持っていた同市委文古墳、これも戦前の開墾でよく分からなくなっている。

中期では、播磨の神戸市五色塚古墳（前方後円墳）、姫路市壇場山古墳（前方後円墳）、同市輿塚古墳（半壊、前方後円墳）加西市玉丘古墳（前方後円墳）、加古川市行者塚古墳（前方後円墳）、摂津の尼崎市池田山古墳（消滅、前方後円墳）、神戸市念仏山古墳（消滅、前方後円墳）、但馬の池田古墳（前方後円墳）・丹波の雲部車塚古墳（前方後円墳）など各地に墳長100mを越す在地首長墳が出現する。これに併行か新しいものとして、摂津では尼崎市の伊居太古墳（前方後円墳）と御園古墳（前方後円墳）、伊丹市御願塚古墳（帆立貝式）、芦屋市金津山古墳（帆立貝式）と打出小槌古墳（前方後円墳）がある。その他、神戸市住吉東古墳（帆立貝式）は埋没していた古墳で、人物埴輪・馬形埴輪が出土している。

播磨では、赤穂市蟻無山古墳（帆立貝式）、相生市宿祢塚古墳（帆立貝式）、姫路市山之越古墳（方墳）と宮山古墳（帆立貝式）などが造られている。加古川市では西条古墳群中の人塚と尼塚（帆立貝式）、平荘湖古墳群中の池尻２号墳とカンス塚古墳があり、加西市には亀山古墳（円墳）、小野市王塚古墳（円墳）、明石市幣塚古墳（円墳）、神戸市王塚古墳（前方後円墳）などが築かれた。これらの古墳には甲冑類・武器などの鉄製品や、初期須恵器が副葬されている。

但馬では豊岡市茶臼山古墳（円墳）と北浦18号墳（円墳）、日高町の馬場ヶ先古墳（消滅）、香美町の庵の谷２号墳（半壊、前方後円墳）がある。養父市には上山古墳（前方後円墳、国木とが山古墳）、朝来市に船宮古墳（前方後円墳、牛形埴輪）が造られている。丹波では篠山市新宮古墳（円墳）と北条古墳（方墳）があり、丹波市には長野木戸古墳群、久良部１号墳（円墳）が築かれた。淡路では木戸原遺跡に豪族居館が見つかったが、なぜ大型墳墓を造らなったのかを明らかにすることが課題である。

後期古墳は全ての地域に数多く造られており、注目されるものを取り上げてみたい。摂津では、宝塚市中山寺古墳（横穴式石室15.2m）、土師器の竈のミニチュア品を持つ尼崎市城山10号墳と三条古墳などがある。また、宝塚市の中山荘園古墳は、二重ないし三重の外護列石を持つ八角形墳である。さらに、三田市では金銅製冠が出土した西山６号墳、横穴式石室に棚を持つ東仲古墳、横穴式木室墳を持つ平方古墳群と西山古墳群、終末期の横口式石槨を持つ奈良山12号墳などが築かれている。

播磨には、たつの市西宮山古墳（前方後円墳、横穴式石室、金製垂飾付耳飾）と長尾タイ山古墳（円墳、横穴式石室、馬鐸・馬形埴輪）、そして金糸を出土した加古川市池尻15号墳と家形石棺を持つ池尻16号墳（横穴式石室13.8m）がある。たつの市では、玄室が穹窿式の構造を持つ平面方形に近い姥塚古墳もある。同様のものに姫路市飾東１号墳、同市丁山頂古墳などが見られる。相生市には那波野古墳（横穴式石室10.6m）、三木市では単鳳環頭大刀の柄頭を発見した窟屋１号墳（横穴式石室10.85m）がある。なお、装飾大刀の分布は後の山陽道（中井古墳群など）、美作道（高畑古墳群など）など交通の要衝に位置するものが多い。その他、姫路市には西脇古墳群（横穴式石室、小竪穴式石室）や同市安富町の塩野六角墳（横穴式石室）も造られている。加東市名草３・４号墳と小野市中番２・18号墳は横穴式木室墳（カマド塚）と判明した。さらに、漁民の墳墓とされる相生市壺根古墳群（小竪穴石室）がある。

但馬では、養父市に大藪古墳群があり、禁裡塚古墳（横穴式石室12.5m）から装飾付須恵器の小像（馬）が出土している。同市箕谷古墳群では２号墳の副葬品の大刀に銘文「戊辰年」があり、西暦608年を示すことが明らかになった。香美町では、金銅装の環頭大刀と頭椎大刀を発見した文堂古墳（横穴式石室）がある。豊岡市では、二見谷古墳群（横穴式石室）、見手山横穴墓群などが築かれた。

丹波では篠山市洞中古墳群があり、前方後円墳の２号墳は横穴式石室（10.7m）、円墳の１号墳は丹波最大の横穴式石室（約15m）を持つ。その他、同市箱塚古墳群（横穴式石室）、沢の浦古墳群（横穴式石室、陶館が出土）、稲荷山古墳（T字形穹窿式の横穴式石室）が造られている。丹波市には井原至山古墳（横穴式石室）、東奥古墳群（横穴式石室）などがある。

淡路では、南あわじ市西山北古墳が淡路最大の横穴式石室（7.93m）を持つ。洲本市では曲田山古墳（横穴式石室7.8m）、淡路市には小竪穴石室や箱式石棺と横穴式石室を持つ明神古墳群が造られている。その他、南あわじ市には漁民の墓とされる沖の島古墳群（小竪穴式石室と横穴式石室）がある。副葬品には、棒状石製品と蛸壺・釣針・土錘などの漁具が見られた。

次に、祭祀遺跡では石製模造品と鉄器を出土した宍粟市伊和遺跡（対象・宮山）、土製模造品を出土した加東市河高上ノ池遺跡（境界・峠の祭祀）がその代表である。

窯跡では、全国最古とされる神戸市出合窯跡（４世紀末、陶質土器）、これに播磨では明石市赤根川・金ヶ崎窯跡（６世紀初頭）、加古川市神野大林窯跡（６世紀前半）、姫路市八代窯跡（６世紀前半）・青山窯跡（６世紀前半）があり、同市西脇付近には５世紀代の古い窯が存在する。たつの市では碇岩窯跡（６世紀初頭）、相生市に那波野丸山窯跡（５世紀末）がある。その他、兵庫県で初の埴輪窯跡が加古川市坂元遺跡で検出された。石見型盾形・家形・人物・鹿形・馬形埴輪などの形象埴輪を出土している。

摂津では三田市郡塚窯跡（５世紀末）、但馬では豊岡市鬼神谷窯跡（６世紀初頭）、丹波では氷上市鴨庄古窯跡（７世紀前半）、淡路では汁谷窯跡（７世紀前半）がそれぞれの地域で初期のものである。

**奈良・平安時代以降**については、実に発掘調査件数の約７割を占めており、文献では知ることのできない様々な土地に刻まれた歴史を復元している。

官衙遺跡では、最大の成果が神戸市祇園遺跡（園池・邸宅）と楠・荒田町遺跡（神戸大学医学部付属病院構内、二重濠）の発掘である。平清盛が遷都した「福原京」の関連遺跡と考えられる。

播磨国府は姫路市本町遺跡でほぼ間違いなく、国分寺・国分尼寺（同市御国野町）も確定している。但馬国府は、豊岡市日高町祢布ヶ森遺跡が第二次国府で、深田遺跡・川岸遺跡などが関連遺跡となっている。国分寺（日高町国分寺）・国分尼寺（同町水上）も確定し、課題は第一次国府の所在地である。筆者は、考古学の成果から出石町袴狭遺跡を最有力地と考える。淡路の国府は決め手になる遺跡がなく、調査が進んだ国分寺や国分尼寺の所在地（南あわじ市八木国分）との関係から、同市市周辺とされている。

次に、郡衙や駅家関係の遺跡を見ていく。播磨では、佐用町八反田遺跡（讃容郡衙）、宍粟市千本屋廃寺の周辺か（宍禾郡衙）、赤穂市有年原・田中遺跡（赤穂郡衙）、たつの市小神南遺跡（揖保郡衙）、姫路市辻井遺跡（飾磨郡衙）、姫路市東前畑遺跡（神前郡衙）、高砂市塩田遺跡（印南郡衙）、加古川市溝ノ口遺跡（賀古郡衙）がほぼ確定、三木市窟屋古墳の周辺か（美嚢郡衙）、加西市殿原廃寺周辺か（賀毛郡衙）、思い出遺跡（託賀郡衙）、明石市吉田南遺跡（明石郡衙）が候補地である。山陽道の駅家は西から上郡町落地遺跡（野磨駅家）、上郡町高田宿遺跡の周辺（高田駅家）、たつの市小犬丸遺跡（布勢駅家）、姫路市向山遺跡（大市駅家）、姫路市今宿丁田遺跡（草上駅家）、姫路市北宿遺跡（佐突駅家）、加古川市古大内遺跡（賀古駅家）、明石市長坂寺遺跡（仮称邑美駅家）、明石市太寺廃寺周辺（明石駅家）。

美作道は、東からたつの市越部廃寺周辺（越部駅家）、旧三日月町新宿廃寺周辺（中川駅家）である。その他、佐用町長尾・沖田遺跡で美作道・因幡道と考えられる道路跡を検出している。

摂津では神戸市室内遺跡（八部郡衙）、神戸市郡家遺跡（菟原郡衙）がほぼ確定、伊丹市南本町遺跡（武庫郡衙）、神戸市宅原遺跡（有馬郡衙）、川西市小戸遺跡周辺（川辺郡衙）が候補である。山陽道駅家は神戸市大田町遺跡（須磨駅家）、芦屋市芦屋廃寺周辺（葦屋駅家）であろう。

但馬では、豊岡市袴狭遺跡群（荒木遺跡、出石郡衙）、豊岡市福成寺遺跡（城崎郡衙）がほぼ確定、美含郡衙は不明、新温泉町井土廃寺周辺（二方郡衙）、香美町殿岡廃寺周辺（七美郡衙）、南構散布地（気多郡衙）、朝倉・米里遺跡（養父郡衙）、朝来市釣坂遺跡（朝来郡衙）が候補となっている。山陰道の駅家は西から新温泉町八日市遺跡（面治駅家）、不明（射添駅家）、香美町前田遺跡（山前駅家）、養父市八木・殿屋敷遺跡（養耆駅家）、養父市大藪古墳群周辺か（郡部駅家）、朝来市柴遺跡（粟鹿駅家）であろう。その他、朝来市加都遺跡に山陰道と山陽道を結ぶ（仮称）但馬道の道路跡を発見している。

丹波では、篠山市東浜谷遺跡（多紀郡衙）、丹波市山垣・七日市遺跡（氷上郡衙支所）、丹波市市辺遺跡（氷上郡衙本所）。山陰道の駅家は西から佐治駅家が不明、星角駅家も不明（柏原陣屋跡下層遺跡が候補）、篠山市西浜谷下小西ノ坪遺跡（長柄駅家）、小野駅家は不明となっている。

淡路では、淡路市郡家長谷遺跡（津名郡衙）、南あわじ市嫁ケ渕遺跡（三原郡衙）。南海道の駅家は紀伊側から由良駅家が不明、大野駅家は洲本市野上遺跡（前期）、同市下内膳遺跡（後期）と考えられ、福良駅家は不明である。なお、廃止された駅家（神本）には南あわじ市幡多野水遺跡が注目できる。

兵庫県の特徴である生産遺跡（製鉄・製塩・須恵器窯）では、『播磨国風土記』に鉄の記載があり、奈良県大官大寺出土の木簡にも「讃用郡駅里鉄十連」とある。記載のとおり、佐用町西下野遺跡では、砂鉄を使用する製鉄炉を５基と工房などを検出している。奈良時代の遺構であり、同町の永谷遺跡・東徳久遺跡でも奈良時代の製鉄炉を発見した。佐用郡は、この時期の製鉄遺跡の宝庫といえよう。

製塩遺跡では、平城京跡出土木簡に「淡路国三原郡阿麻郷……調塩三斗」とあり、南あわじ市（三原郡）の遺跡が注目される。特に、同市阿万の九蔵遺跡は石敷製塩炉３基と鹹水溜土坑・掘柱立建物24棟を検出し、和同開珎の銀銭が出土している。その他、古墳時代から続く淡路市貴船神社遺跡がある。

窯跡は、７世紀の前半までに各郡単位で１カ所は造られており、播磨国は奈良時代以降「調」として瓰四十八口などを貢納する、須恵器の産地である。特に、加古川市志方窯跡群（中谷窯）の製品は平城京からも出土する優品である。また、後に平安時代後期東播系須恵器として西日本一帯に拡がった神出窯・魚住窯・明石三本松窯も存在し、これらの窯では平安京の離宮や寺院の瓦も生産している。

最後に寺院跡関連では、県下最古のたつの市小神廃寺（飛鳥時代）があり、明石市高丘窯で製作された瓦（７世紀前半）が大阪府四天王寺に供給されている。摂津では、伊丹市伊丹廃寺（法隆寺式）、尼崎市猪名寺廃寺（法隆寺式）、芦屋市芦屋廃寺、神戸市房王寺遺跡などの白鳳時代創建のものがある。

東播磨では明石市太寺廃寺、多可町多可寺遺跡（四天王寺式、鋳造遺構、牧野・与兵衛池瓦窯）、小野市広渡廃寺（薬師寺式）・同市新部廃寺（薬師寺式）、加西市殿原廃寺（法隆寺式、既多寺、下道山瓦窯）・同市繁昌廃寺（薬師寺式、天神山瓦窯）、加古川市野口廃寺・同市西条廃寺（法隆寺式、西条瓦窯）・同市石守廃寺（法隆寺式）などがある。西播磨では、姫路市溝口廃寺・同市辻井廃寺・同市下太田廃寺（四天王寺式、打越瓦窯）、たつの市金剛山廃寺・同市奥村廃寺・同市越部廃寺、宍粟市千本屋廃寺、佐用町長尾廃寺、上郡町与井廃寺などがある。

但馬では、豊岡市薬琳寺廃寺と朝来市法興寺跡（鋳造遺構）など。丹波では篠山市寺内遺跡（八木田

瓦窯)、丹波市三ツ塚廃寺（新治廃寺式、天神瓦窯）など。淡路には、淡路市志筑廃寺（土生寺瓦窯）などがある。

## 8. おわりに

今年度で、長いようで短かった35年の「行政考古学」の生活が終わる。こうした立場でしか考古学との関わりを持ち得なかったが、考古学の最終研究目的が地域の歴史叙述にあるのなら、県内市・町史の刊行数と叙述内容を見ても明らかなように、行政考古学もそれなりの役割は果たしてきたのであろう。さらに、兵庫県の文化財保護行政の画期に立会ってきたものとして、県下の発掘・研究史を書き残すことも任務の一つと考え、不充分ではあるが長々と記した次第である。

昭和50年代からの大規模開発に伴う緊急調査によって膨大な資料が蓄積され、行政内研究者も急増した。兵庫県で発掘に携わった研究者には、県内で生まれ育って発掘調査を行い他県へ転居した人（和田千吉など)。逆に、他県から移り住んで発掘調査に関係した人（高井悌三郎など）や、生まれ育ちと発掘も兵庫県で活躍した人（今里幾次など）がいる。現在、活動中の行政考古学者にも色々のパターンがある。悪く捉えれば、考古学もサラリーマン化（食を得るためだけの職）してきたことの現われと言えようか。しかし、大規模開発の一段落に伴って記録保存の調査は減少し、考古学研究も安定期に入ってきた。今こそ、この膨大な資料を次の研究に生かせるよう、行政考古学の後輩たちにもう一頑張りして欲しいと願っている。

研究活動の分野を見ると、研究の基盤として淡路に「淡路考古学研究会（1971年～)」、但馬には「但馬考古学研究会（1978年～)」が存在する。それぞれ会誌を発行し、地道な活動を行っている。また、博物館施設が紀要を発行するのは当然として、県埋蔵文化財調査事務所も平成13年から『研究紀要』を刊行してきた。播磨では、近年若手研究者が「播磨考古学研究集会（2001年～)」の活動を始め、研究テーマを決めて資料の集成や研究会集会を開催している。さらに、『兵庫考古』を引き継いだ「兵庫考古学研究会（1995年～)」は、それぞれ地域の論集やテーマに基づいた資料集を刊行してきた。しかし、県内全域をまとめた本格的な研究論文集は昭和60年の『松岡秀夫傘寿記念論文集　兵庫史の研究』が最初で、平成２年の『今里幾次先生古希記念　播磨考古学論叢』、平成６年の櫃本誠一編『風土記の考古学』②、そして平成８年に村川行弘編『兵庫県の考古学』を刊行して以来、広域的なものは出版していないのが現状である（わずかに、喜谷美宣先生古希記念論集と間壁葭子喜寿記念論文集があるのみ)。

この原因には、国立の神戸大学に考古学の講座（教授・研究室）がなかったことと、旧五カ国の広域にわたってリーダーシップを取るような人材が育たなかった（兵庫県に残らなかった）ことなどが考えられよう。

そうした中、資料集としては平成４年に『兵庫県史』（考古資料編）が出版され、各市町教育委員会でも発掘調査報告書や調査年報を刊行している。さらに、普及啓発のために埋蔵文化財情報誌『ひょうごの遺跡』、『三田考古』、『豊岡発掘だより』・『豊岡発掘情報』、『八鹿発掘だより』なども作成してきた。

研究安定期に入った今こそ各地域の研究者が連携・協力して、兵庫県の考古学はここまで明らかになったということを県民に伝えられるよう、県立考古博物館がシンポジウムの開催・研究書の出版などを行う中核になって欲しい。筆者も、OBとしてこれに関与出来ればと考えている。

最後に、本稿を執筆するにあたり、元県立埋蔵文化財調査事務所の池田正男氏、県立考古博物館の渡辺昇氏と情報プラザ保管の松下勝文庫、そして高校以来の畏友志水豊章氏に資料収集を始め多大なご教

示を戴いた。また、市・町教委埋蔵文化財担当者にも多くの情報提供を受けている。記して、深く感謝したい。なお、発掘調査の年月は県立埋蔵文化財調査事務所の発掘一覧及び〔松下1976〕を使用したため、年度別に記載されており１～３月が多少混乱しているかも知れない。ご寛恕願いたい。

〔引用文献〕


赤堀　素一　1889 「雑報　淡路国津名郡ノ塚穴（情報提供）」『東京人類学会雑誌』第４巻第41号

赤松　啓介　1937 「古代集落の形成と発展過程―播磨加古川流域の研究―」『経済評論』第４巻第２号

赤松　啓介　1957 「焼山群集墳の破壊を訴える」『私たちの考古学』第15号

浅田　芳朗（姫路原始文化研究会）　1963 『中国人類学会とその業績』　姫路市教育委員会

浅田　芳朗　1970 『人見塚の家』　和田千吉先生記念会

浅田　芳朗　1982 『考古学の殉教者―森本六爾の人と学績―』　柏書房

石上　元一　1932 「郡家荒神山古墳の調査について」『群華』第32号　郡家町教育委員会

稲葉　宅蔵　1898 「雑報　但馬に於ける古墳（情報提供）」『東京人類学会雑誌』第14巻第152号

井上　洋一　1982 「但馬・気比銅鐸をめぐる２・３の問題」『考古学雑誌』第68巻第１号

今里　幾次　1939 「姫路市近郊の先史時代遺跡」『兵庫史談』昭和14年11月号

今里　幾次　1943 「播磨市之郷弥生式遺跡の研究」『古代文化』第14巻９号

今西　龍　1913 「但馬国城崎郡気比の銅鐸発見地」『考古学雑誌』第４巻第３号

ウィリアム・ゴーランド　1981 「表１．日本のドルメンの寸法」『日本古墳文化論』　創元社

上田　哲也他　1965 『播磨大中』　播磨町教育委員会

上田　哲也他　1966 「姫路名古山遺跡と銅鐸の氾型」『播磨の弥生文化』　東洋大学附属姫路高校

梅原　末治　1923 「淡路出土の一遺品を記して銅鐸の形式分類に及ぶ」『芸文』第14年第12号

梅原　末治　1925 「揖保郡香島村吉島古墳」「出石郡神美村の古墳」「城崎郡今津の小見塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第２輯

梅原　末治　1927 「山陰道発見の銅鐸　気比銅鐸」『銅鐸の研究』　大岡山書店

梅原　末治　1932 「富合村玉丘古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第９輯

梅原　末治　1937 「摂津万籟山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』二　日本古文化研究所

梅原　末治　1939 「川辺郡小浜村赤烏七年鏡出土の古墳」「加西郡在田村亀山古墳と其の遺物」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第14輯

梅原末治・小林行雄　1941 「川辺郡園田村大塚山古墳と其の遺物」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第15輯

エドワード・S・モース　1879 「Shell Mounds of Omori」『Memoirs of the Science Department University of Tokio Japan』Vol. I 、Part I

大平　　茂　2006 「地域博物館の考古展示について」『國學院大學博物館紀要』第30輯

大平茂・種定淳介　2009 「昭和44年度発掘調査出土の古津路銅剣について」『研究紀要』第２号　兵庫県立考古博物館

岡本　　稔　1971 「淡路考古学の歩み」『淡路考古学ニュース』創刊号　淡路考古学研究会

岡山　真実他　1987 『淡路・沖ノ島』　西淡町教育委員会

沖田　真一　1966 「下内膳加茂校遺跡出土品について」『淡路地方史研究会会誌』第３号

奥村　探古　1897 「摂津国武庫郡おとめ塚」『考古学会雑誌』第１編第６号

鍛冶　利夫　1932 「考古学上より瞥見した淡路の遺跡遺物について」『考古学雑誌』第22巻第11号

鍛冶　利夫　1933 「淡路国発見の銅鐸数について」『考古学雑誌』第23巻第４号

鎌谷　木三次　1942 『播磨上代寺院阯の研究』　成武堂

加茂国民学校　1943 「校地出土品について」『兵庫教育』643号　兵庫県教育委員会

喜谷　美宣他　1961 『岸遺跡発掘調査報告』加古川市文化財調査報告１　加古川市教育委員会

喜谷　美宣他　1964 『日笠山貝塚』第１次発掘調査報告　高砂市文化財調査報告１　高砂市教育委員会

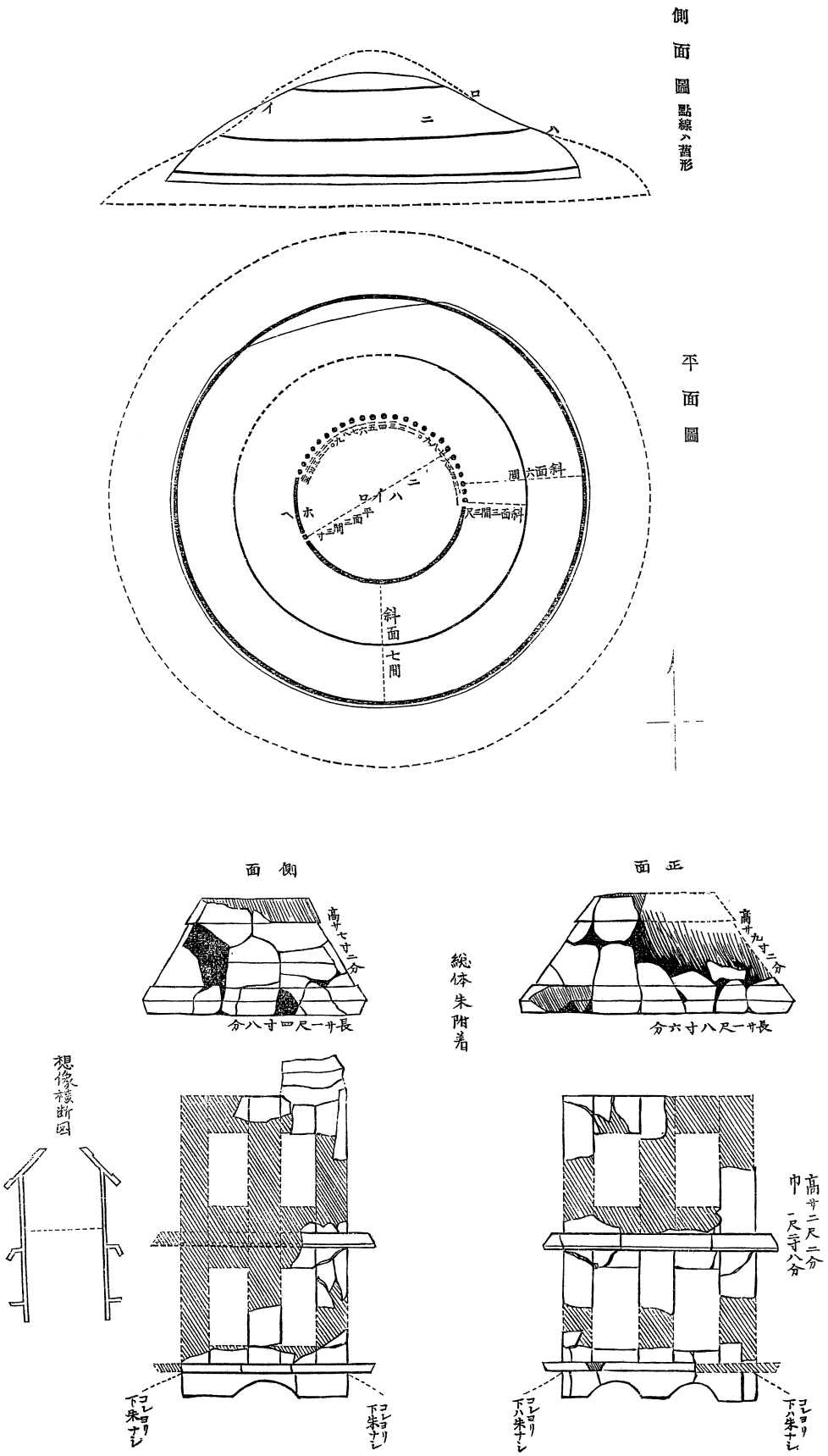
木戸　勇助　1910 『車塚一蒔』

雲部車塚古墳研究会　2010 「雲部車塚古墳の研究」『研究紀要』第３号　兵庫県立考古博物館

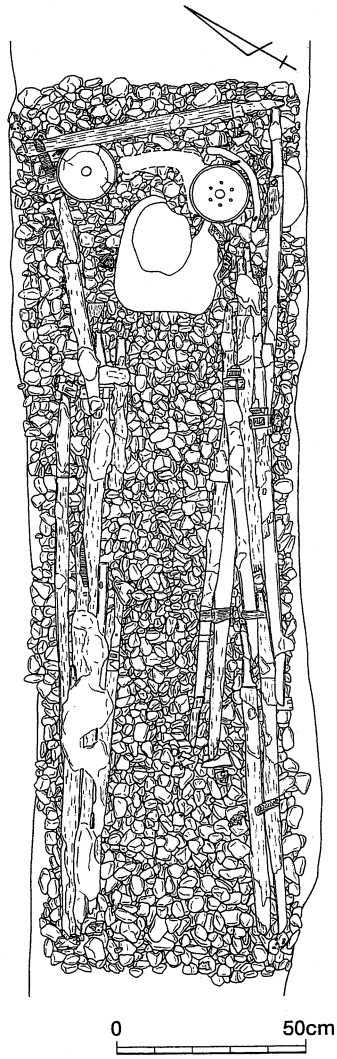
栗山　一夫　1934、35 「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」（１）、（２）、（３）、（続篇１・続篇２）、（続篇３・４）『東京人類学会雑誌』第49巻第7,8,9号、第50巻第１・２号、３・４号

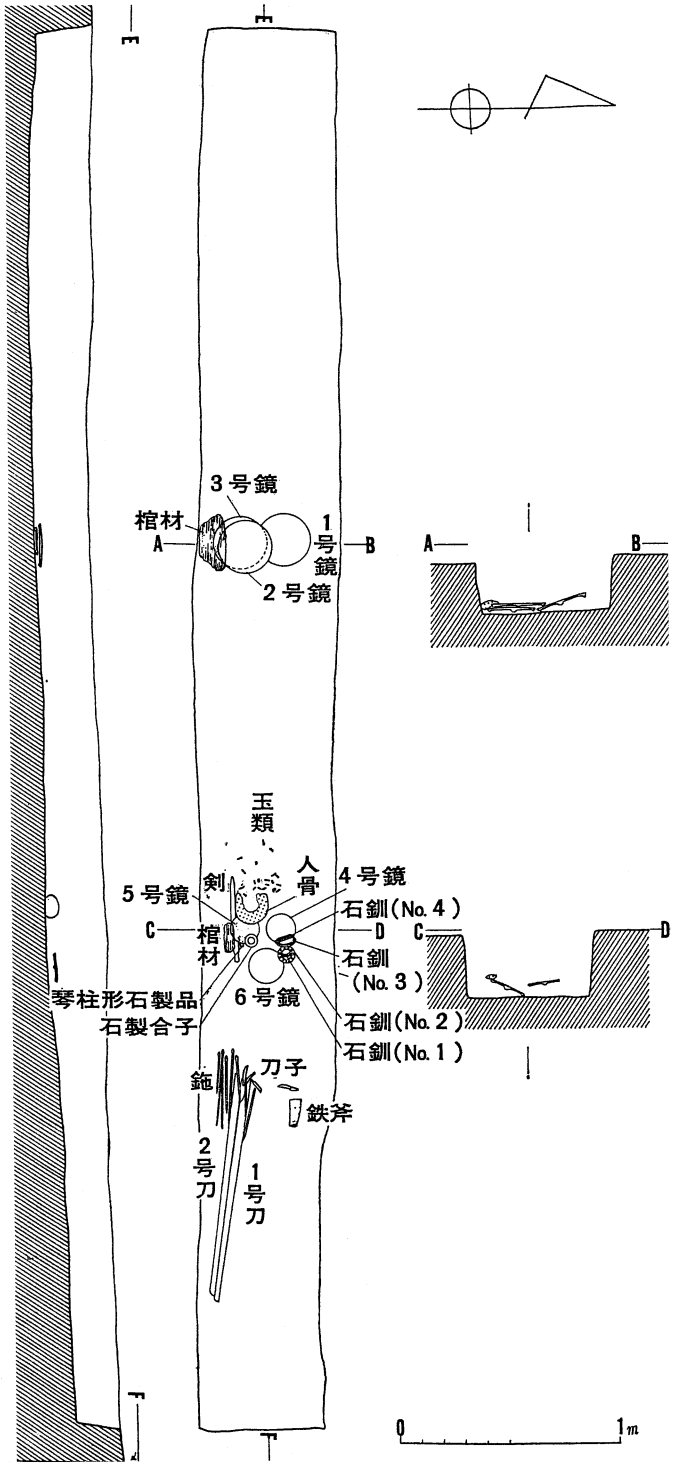
紅野　芳雄　1940 『考古小録』　西宮史談会

小西　孝四郎　1916 「姫路貝塚の発見」『東京人類学会雑誌』第31巻第８号
小林　行雄　1929 「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』第１巻第４号　史前学会
小林　行雄　1933 「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第４巻第４号　東京考古学会
近藤　義郎他　1983 『吉島古墳』新宮町文化財調査報告４　新宮町教育委員会
近藤　義郎他　1985 『養久山墳墓群』　揖保川町教育委員会
笹川　種郎　1888 「播磨ノ塚穴及ビ千壺ノ事」『東京人類学会雑誌』第２巻第21号
彙報　1912 「新発見の銅鐸」『考古学雑誌』第２巻第８号の彙報欄
末永　雅雄他　1968 『摂津加茂』　関西大学
田岡　香逸　1959、1960 「伊丹廃寺址発掘調査概報、(二)」『史迹と美術』第292号、第303号
高井　悌三郎他　1966 『摂津伊丹廃寺跡発掘調査報告書』　伊丹市教育委員会
辰馬　悦蔵　1918 「淡路松帆村発見の銅鐸に就て」『歴史地理』第32巻第２号
辰馬　悦蔵他　1928 「会下山二本松古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第５輯
谷渕　　勝　1980 「山根武先生を偲ぶ」『考古学研究』第27巻第３号
坪井　正五郎　1894 「七年前の三十国巡回日記」第二回『東京人類学会雑誌』第10巻第113号
徳田　誠志他　2006 「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第58号　宮内庁
直良　信夫　1931 「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品」「同（二)」『東京人類学会雑誌』第46巻第５・６号
直良　信夫　1936 「日本の最新世と人類発達史」『ミネルヴァ』第１巻第４号
直良　信夫　1943 『近畿古代文化叢考』　葦牙書房
八賀　　晋　1982 『富雄丸山古墳　西宮山古墳出土遺物』　京都国立博物館
春成　秀爾編　1987 『大歳山遺跡の研究』　真陽社
春成　秀爾編　1991 『近畿古代文化論考』　木耳社
春成　秀爾　1994 『「明石原人」とは何であったか』NHKブックス715　日本放送出版協会
樋口　清之　1941 「摂津保久良神社遺蹟の研究」『史前学雑誌』第11巻２・３号　史前学会
櫃本　誠一他　1972 『城の山・池田古墳』　和田山町教育委員会
福井　優編　2010 『考古学播磨の先人　浅田芳朗』平成22年度冬季企画展パンフレット　姫路市埋蔵文化財センター
福井　英治他　1982 『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集
藤岡弘・橋爪康至　1969 『小野市中番地区群集墳調査概報』　小野市教育委員会
古家　実三　1958 「加西郡北条町野條鍋山廃寺址の発掘調査」『播磨郷土研究』第３号　加西郡郷土研究会
堀内　　清　1914 「但馬の新貝塚」『歴史地理』第23巻第１号
増田　重信　2007 『播磨地方文化史研究―増田重信のあしあと―』　真陽社
松岡　秀夫他　1952 『兵庫県赤穂郡西野山第三号墳』有年考古館研究報告第１輯
松岡　秀夫　1976 「赤穂市上高野発見の銅鐸鎔笵」『考古学研究』第23巻第２号
松下　　勝　1976 「兵庫県における発掘調査の推移」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第３集
松下　勝他　1978 『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告第12冊
松本正信・加藤史郎他　1970 『宮山古墳発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅰ
松本正信・加藤史郎他　1972 『宮山古墳第２次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅳ
松本正信・加藤史郎　2009 「西条52号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会実行委員会
丸山　潔他　2006 『史跡五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復元整備調査報告書』　神戸市教育委員会
武藤　　誠　1949 「赤穂郡高田村西野山古墳調査略報」『西播史談会々報』第10号
武藤　誠他　1969 『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』兵庫県文化財調査報告第１冊
村川行弘・石野博信　1964 『会下山遺跡』芦屋市文化財調査報告第３集　芦屋市教育委員会
村川　行弘　1967 『田能』　学生社
八木　奘三郎　1894 「播磨国千壺取調報告」『東京人類学会雑誌』第10巻第104号
八木　奘三郎　1901 「丹波国多紀郡雲部村の古墳発見品」『東京人類学会雑誌』第17巻第189号
和島　誠一　1973 「兵庫県宍粟郡千種町西河内のタタラ遺跡発掘」『日本考古学の発達と科学的精神』
和田　千吉　1897 「播磨国飾磨郡白国村人見塚調査報告」『東京人類学会雑誌』第12巻第132号、第134号




第１図　姫路市人見塚古墳・家形埴輪実測図（和田千吉1897から）




第２図　朝来市茶すり山古墳第１主体部中央区画副葬品出土状況（左、調査概報より）
同　城の山古墳主体部副葬品出土状況（右、櫃本誠一他1972より）